

京都府埋蔵文化財情報

第46号

京都府木津町西山塚古墳の調査-----	伊賀 高弘-----	1
近畿地方の弥生勾玉-----	小山 雅人-----	12
中海道遺跡の再検討(2) -----	中川 和哉-----	27
—平成4年度発掘調査略報—-----		34
5. 薬師古墳群	9. 日置遺跡	
6. 定山遺跡	10. 上中遺跡第6次	
7. 天若遺跡第4次	11. 燈籠寺遺跡第6次	
8. 祇園谷遺跡		
第10回 小さな展覧会「京都発掘'92」を終えて-----		43
府内遺跡紹介 57. 宇治宿禰墓-----		47
長岡京跡調査だより-----		50
センターの動向-----		53
府内報告書等刊行状況一覧-----		55
受贈図書一覧-----		61

1992年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版 京都府木津町西山塚古墳の調査



(1) 内部主体 全景（南から）



(2) 第1主体 草製漆塗盾 出土状況
（上が北）



(3) 第1主体 南副室内 遺物出土状況
（上が北）

京都府木津町西山塚古墳の調査

伊 賀 高 弘

1. はじめに

西山塚古墳は、京都府の南端で、平城山丘陵を挟んで大規模な古墳群や平城京を擁する奈良市と境界を接する相楽郡木津町に所在する。

古墳の位置する一帯は、関西文化学術研究都市の開発区域で、昭和59年度から住宅都市整備公団の依頼を受け、当調査研究センターが主体となり継続的に調査を実施してきた。その結果、これまでに上人ヶ平遺跡や瓦谷古墳・瀬後谷遺跡(窯跡群)など、注目を集める成果が得られた。

平成3年度は、こうした一連の調査の一環として、上記の遺跡の北東に近接する西山塚古墳の全面調査を行った。その結果、古墳の形態や規模・内部施設の構造や副葬品の内容が明らかになった。

本稿では、調査で判明した事実を紹介し、そのあと若干の問題点を整理することとする。

なお、現地調査は、諸般の事情で断続的に平成4年9月まで実施した都合、出土遺物の整理が十分行き届いていないので、遺物については将来の報文にて報告したい。

2. 調査概要

(1) 古墳の立地

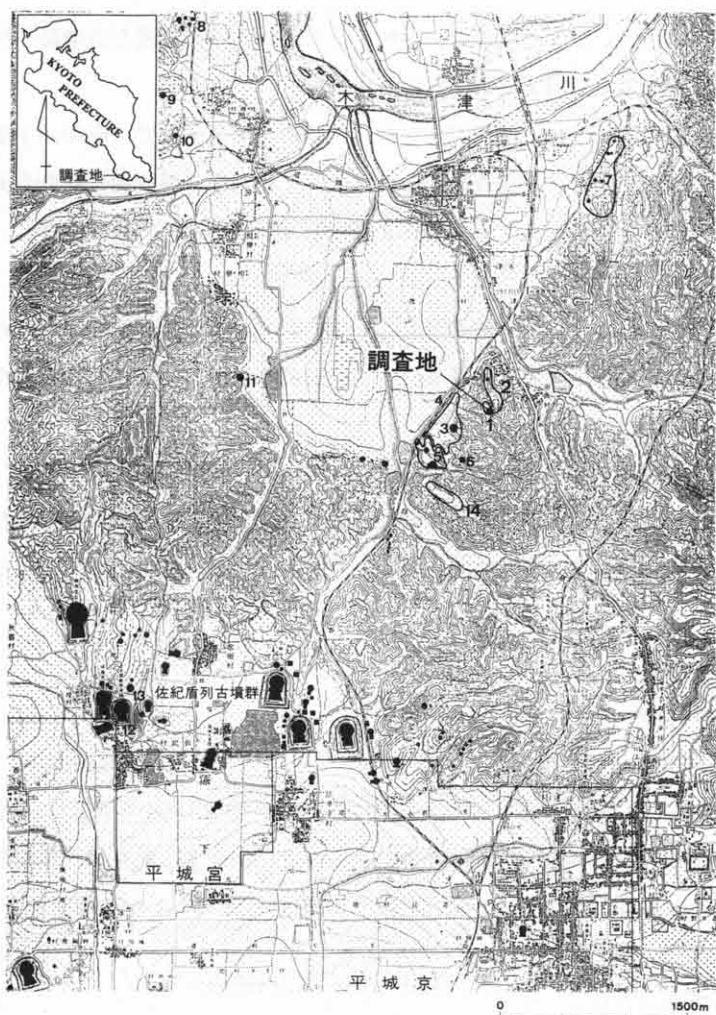
西山塚古墳は、木津川水系の河谷盆地である山城盆地の南端を馬蹄形に取り囲む丘陵(平城山丘陵)上に立地する。すなわち標高100m前後の山塊から派生する尾根の鞍部の比較的高い場所(標高77m前後)に位置するが、古墳が立地する地点は、尾根筋といっても幅約100m・長さ約170mにわたって平坦な地形であり(西側の沖積平地との比高差は約40m)、古墳は、その平地部の南寄りに占地している。このため、丘陵尾根部に通有にみられる古墳とは異なり、平地部に築造される古墳の築造技法、すなわち周濠を完周させ、その排土を利用して墳丘盛土とする方法で築かれている。

(2) 墳丘と外部施設

墳形は円墳で、墳丘基底径(対向する周濠外傾斜面の下縁間の規模)は26mを測る。

墳丘は2段築成で、1段目墳丘上面テラス(現状で約0.3~1.3mを測るが、その外縁は旧状が失われている)の内方に2段目墳丘(基底径約20m)を全て盛土で築く。周濠は、底面に幾分起伏があるが、基本的には逆台形状の断面形を呈し、1段目墳丘の基底ラインを明示している。上縁幅は現状では約5~7mを測るが、墳丘内に保存されている旧表土面の高さから推定すると、本来は幅7.5m・深さ1.5m前後の規模を有していたことが復元できる。

外部施設として、葦石(2段目墳丘斜面)と埴輪列(1段目墳丘テラス)を確認したが、残存状態は、墳丘面の流失等で良好とはいえず、その多くが周濠内に転落していた。総出土



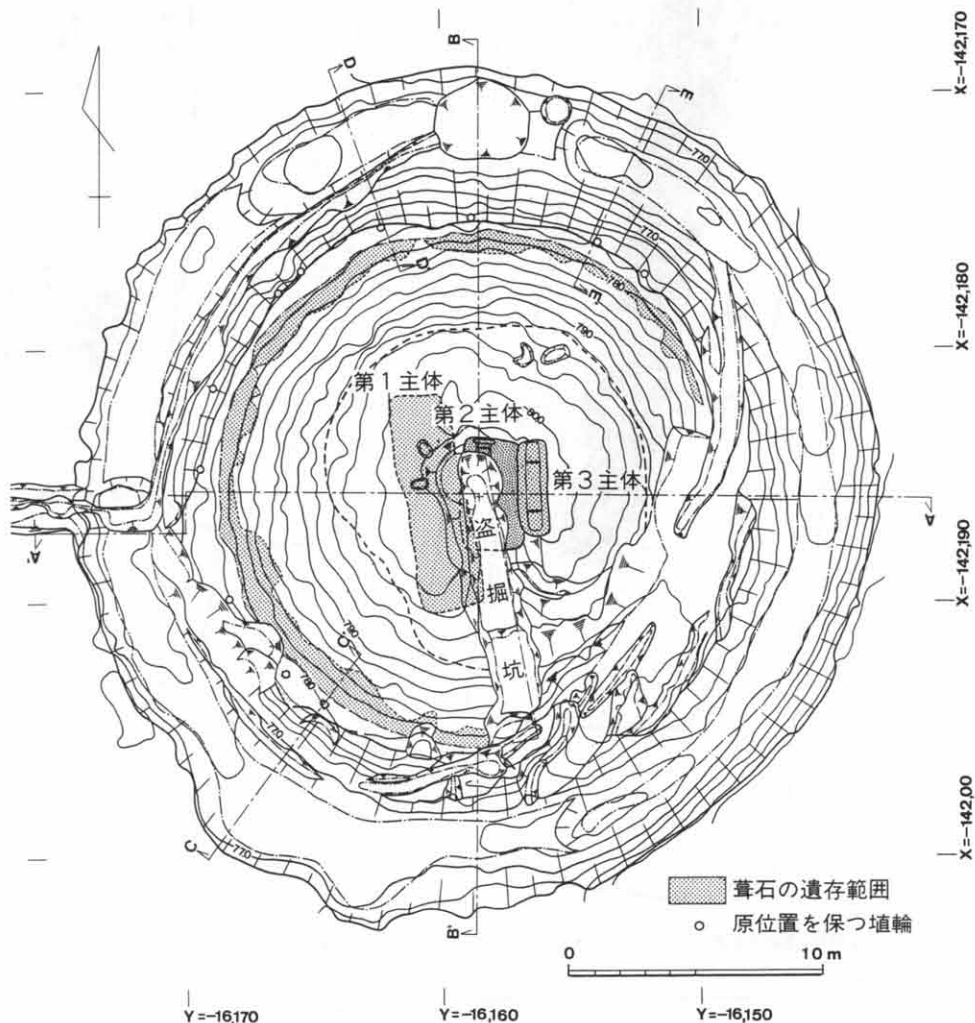
第1図 調査地位置図(周辺遺跡配置図 仮製地形図に加筆)

- | | | | | |
|----------|-----------|-------------|-----------|-----------|
| 1. 西山塚古墳 | 2. 西山遺跡 | 3. 瓦谷古墳 | 4. 瓦谷遺跡 | 5. 上人ヶ平遺跡 |
| 6. 幣羅坂古墳 | 7. 内田山古墳群 | 8. 吐師七ツ塚古墳群 | 9. 坊谷古墳 | |
| 10. 白山古墳 | 11. 音乗谷古墳 | 12. 佐紀陵山古墳 | 13. マエ塚古墳 | 14. 瀬後谷遺跡 |

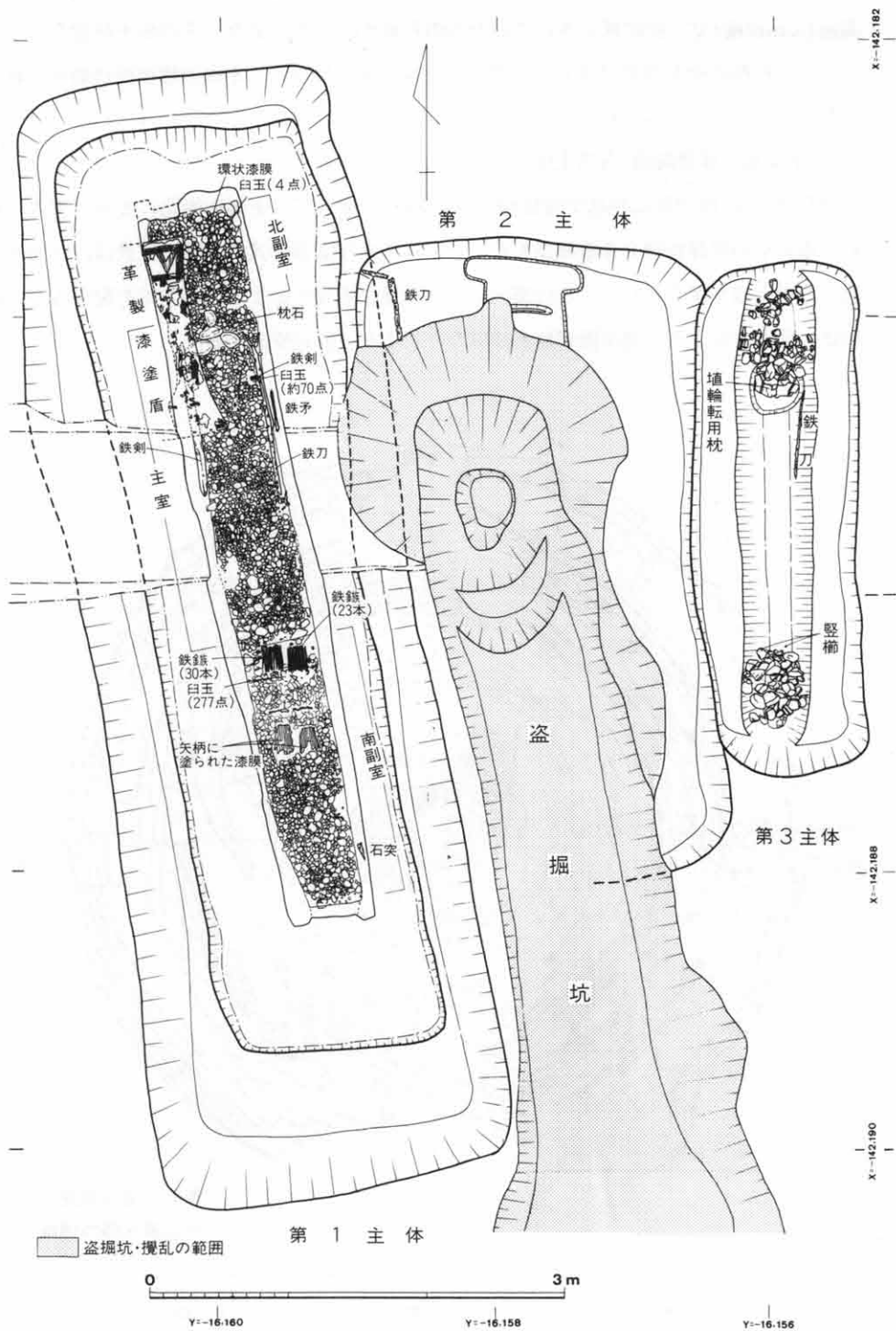
量から判断して、葺石は2段目墳丘斜面全面に、テラスの埴輪列については、比較的長い間隔(2m程度)で一列に樹立されていたものと考えられる。また、その出土位置などから墳頂部の埴輪囲繞も想定できるが、現位置を保つものはなく、本来の墳頂面は削平されて失われているものとみられる。

(3) 墳頂部の埋葬施設(内部主体)

墳丘中央部(墳頂部は現状で直径約12mを測る)において、主軸を南北にとり、東西に並列する大小の埋葬施設を3基確認した。いずれも木棺直葬形式で、その位置は、平面的に観れば中央棺を中心にして、その東西に一部墓壙を重複するように各1棺を配するが、西棺は、後述するように構築面が他とは異なり、より下位に位置する。



第2図 西山塚古墳平面図



第3図 内部主体平面図

構築面の相違および墓壇の重複関係より、西棺→中央棺→東棺の先後関係が確認できるが、3者の配置が墳頂部において均等に割り付けられていることから、当初から3棺並葬を意図していた可能性がある。

そこで、これらを構築順に第1～3主体と呼称し、以下、各主体部ごとにその概要を説明する。

a. 第1主体(西棺) 現存墳頂面を約0.6m掘り下げて初めて検出され、後述するように構築面が他の2主体とは異なってより下位にある。こうした事情に加え、古墳の中心よりやや西に偏って位置することから、盗掘や攪乱を受けていない。

墓壇は、その横断面形が基本的には2段構造を呈する。上段墓壇は、土盛りして構築したものの(構築墓壇^(注1))で、棺の長辺側(東西側)にのみ土堤(土塁)状に存在する(土堤の南北長約8.5m・高さ0.6～0.8m・基底幅約2m、東西の土堤間の距離＝上段墓壇の上幅約2.5m)。

この土堤は、棺の短辺側には周り込まず、両小口は上段墓壇が存在せず側方に開放されていた可能性がある。下段墓壇は、上段墓壇底の縁辺に僅かに平坦面を残してその内方に長方形プランに掘り込まれる(長辺5.8m・幅約1.5m・深さ0.3～0.5m)。

木棺は、板材(厚さ0.05～0.09m)を組み合わせて箱形に構成したもので、内法長4.9m・同幅0.45～0.6m(北側ほど広い)を測る。両小口の棺材の組み合わせ方式は、長辺の側板が小口板を挟んで棺の主軸方向に突出するタイプ(A型)を採る^(注2)。長側辺の側は、通例の組合式木棺と異なり、複数の板材(各辺宛2～3枚)を継ぎ足して構成しており、平面的に観ると各材の接合部を境に側のラインが屈折している。棺底は小礫敷きで、底板は痕跡すらなく当初から設けていなかったものと考えられる。棺内は、2枚の仕切板で3空間に分割し(内法長は北から0.6・2.5・1.8m)、中央の空間に1体の遺骸が頭位を北にして埋葬されていた(枕石と頭骨の遺存による)。棺の設置は、下段墓壇底に直接長側板と小口板・北仕切板を据え置き、周囲に土を裏込めするように充填して棺材を固定する。ただし、墓壇の北端部は、棺の主軸に沿って1mの範囲が1段深く掘り込まれており(排水の機能をはたしたもののかもしれない)、ここに砂質土を入れた上に棺材が置かれている。棺内(四辺の側板で箱形に組まれた内部)には粗砂混じりの土が0.10～0.15mの厚さで充填され、その上面に直径およそ1～5cm程度の円礫(チャートが主体)が上下方向に重層することなく1重に敷設される。この棺底礫敷面は、中央の空間(主室)は長軸方向でほとんど高低差を示さないのに対し、南北の空間(副室)では、いずれも北側ほど高く傾斜させている(充填土の厚さで調整している)。仕切板は、北側のそれは側板と同一面に設置されるが、南仕切板は、棺内にある程度充填土を入れた後、これを溝状に掘り込み、底に扁平な石を並べてこの上に設置する。棺底礫および四辺の側板の内面・仕切板の両面と底面に赤色顔料がみられる

が、いずれも棺として構成する以前の段階で塗抹されていたものと考えられる。

副葬品は、棺内外から出土した。その配置を示すと、棺外では革製漆塗盾^(注3)1張(棺北端から主室の北半の棺蓋上)、鉄矛と石突が1対(棺外東側)が供献されていた(全長3.5m)。盾は、棺の西半に偏って頭部を南にして置かれていたが(全長=高さ約145cm)、棺材の腐朽による棺蓋の陥没にともなって、その東半部(向かって左半部)が棺内に落ち込み、図上復元の根拠は残していたものの概して遺存状態は悪い(最大60cmの幅で残っていたが、棺西側の部分は消失していた)。

棺内遺物は、主室では、北枕で埋葬された1体の遺骸の上半身の両側に鉄製利器類(遺骸の左側に鉄剣・鉄刀各1口、右側に鉄剣1口)が鋒を南にして(刀は刃先を外側にに向けて)置かれていた。枕石は、長径15~20cm大の自然石(円礫)を3個用いて山形プランに設置したもので、付近に頭骨や歯牙が散乱していた。西側の剣と東側の刀には、把部分に漆膜の広がり認められ、黒漆塗木製把装具の痕跡とみられる(素地の木質は腐朽して残っていない)。さらに、刀の把縁突起部の周辺には滑石製白玉が70点余り点在し、把部に付装されていたものかもしれない。

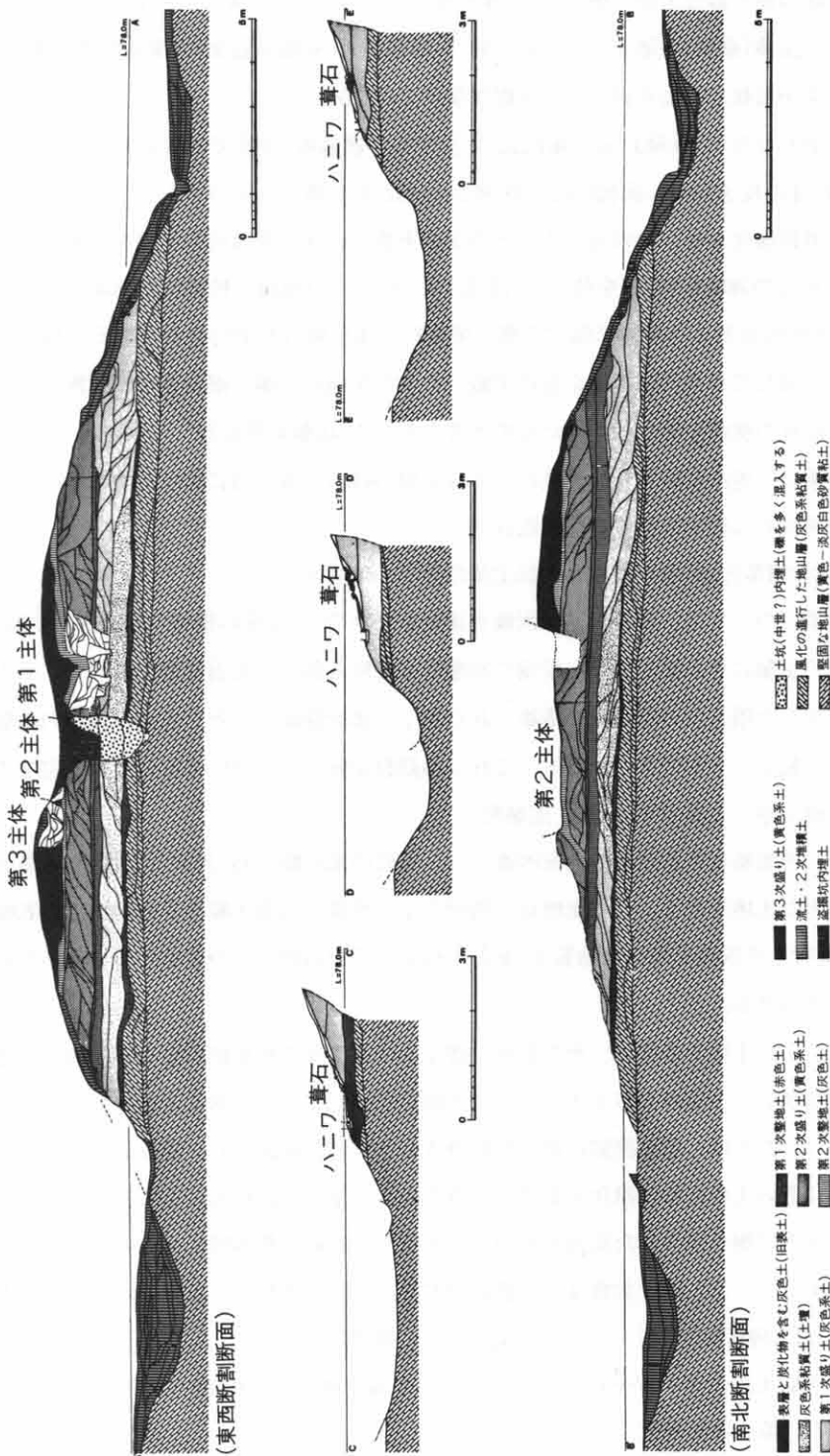
南副室には、北半部に矢鏃が集中して埋納されていた。このうち、仕切板に接するように鋒を北に向けた鉄鏃は、いずれも全長約18cmを測る長頸鏃で、東西2群(東23本・西30本)に分割して収束されていた。矢柄は腐朽して残らないが、その下端の矢羽根の装着部に塗付された黒漆膜が長さ9.5cmにわたって良好に遺存しており(東群の漆膜は遺存状態が悪い)、その下端を矢弭とみた場合、矢の全長は80cmに算定できる。また、矢筒(鞆か?)の存在を窺わしめる赤黒それぞれ3単位を縞状に交互に塗り分けた帯状漆膜(幅3cm)が矢と直交する方向に間隔をおいて4条確認された。鉄鏃の周囲には豎櫛7点が鏃を取り巻くように散在し、東西の鉄鏃群の間隙には白玉が277点集中していた。これら矢鏃の南方にはなお1m余りの空間が残されるが、ここには実態を残す遺物は副葬されていなかった。

北副室内は、副葬遺物が乏しく、僅かに用途不明の環状漆膜(外径約8cm)と白玉4点が出土したにすぎない。

b. 第2主体(中央棺) 墳丘のほぼ中央に位置するため、棺の長軸方向にそった溝状の盗掘を受け、大半が破壊されて残らない。

墓壙は、やや幅広の長方形プラン(長軸約4.8m・幅約2.7m)を呈し、その中央に組合式木棺(外寸幅0.6m)を直葬するが、大半が失われている。僅かに残った北小口の状況から、小口板が長側板を挟んで棺に直交する方向に突出する組合方式(B型)を採ることがわかる。

伴出遺物は、墓壙北東部で折損して鋒部を失う鉄刀1口が残されていたにすぎないが、ほかに盗掘抗埋土中や墳丘2次堆積土(流土)中から出土した長頸鏃や須恵器の小片(TK



南北断割断面図は異なったラインの断面図を合成したものである

第4图 西山塚古墳断剖面图

47型式前後の杯・器台・壺・甕がこの埋葬施設からの出土品であった可能性がある。

c. 第3主体(東棺) 第2主体と同一面(=墳頂面)から掘り込まれ(掘込墓壙a類)、隣接する西側が重複してより新しい。盗掘は受けていない。

隅丸長方形プラン(長軸3.7m・幅1.2m)を呈する1段墓壙(現状での深さ0.65m)底に、割竹形木棺(身の長さ3.4m・同幅0.6m・同高さ0.25m)を直葬したものである。棺は、平坦な墓壙底に直接埋置させ、身の高さまでその周囲を裏込め状に埋め戻して棺を固定する。両小口は、拳大の礫塊(自然石を使用)で閉塞する(両小口の礫塊に挟まれた空間の内法長約2.0m)。木棺内面および棺内に面する側の閉塞石に赤色顔料が塗付されている。棺内の北側閉塞石に接して普通円筒埴輪を縦に半截したものを棺の主軸に直交させて設置しているが、これは枕の機能を果たしていたものと考えられる(埴輪転用枕)。

副葬遺物は、棺内に限られ、遺骸の上半身左側(東側)に鋒を南に向けた鉄刀1口が、また南側の閉塞石に接する位置で堅櫛数点が出土した。

(4)古墳の構築方法(墳丘築成と内部主体の構築との関係)

この古墳については、現状保存は困難と評価されたので、墳丘の構築方法を探る目的で、内部主体の主軸に合わせて墳丘を縦横に基盤層まで断ち割り、断面観察を行った。その結果、先に記した墳丘内の深層位に構築された第1主体を確認したとともに、古墳の構築方法の概要を知ることができた。以下、これらの観察記録にもとづいて復元される古墳の構築過程を順を追って説明する(第4図参照)。

①まず、古墳築造予定地の中央部西寄りに、東西の基底幅7.7m(おそらく短径)・高さ約0.5mの低平な土壇を築く。この土壇は、隣接する北西側の旧表土層あるいは地山の表層部(風化が進行して灰色を帯びた粘質土)を若干掘下げてその排土をかき寄せるように形成したものである。

②次に、この土壇を基礎に、その斜面に寄りかけるように小単位の土を連続的に土盛りして(厚約0.5m)、一定の高さを保つように周囲に拡幅していく[第1次盛土]。この土盛りに用いられた土は、周濠掘開の排土が利用されたと推測され、掘り込まれた土が比較的表層に近い土のため、風化を受けた灰色系の土が主体を占める。1段目の墳丘は、周濠掘開で内方に掘り残された基台をそのまま利用するため、基本的にはその上面は旧表土面と一致する。ただ、西～北側は、旧表面がすでに掘り込まれているため、第1次盛土以前に盛土(最大厚0.5m)で同一レベルになるように調整している。

③第1次盛土の上面を水平に均し、赤色系土を薄く敷いて(厚0.05～0.25m)、圧を加えて整地する[第1次整地土]。

④第1次整地土を基礎にして、第1主体を構築する。つまり、この整地土を掘り込んで

下段墓壇とし、その内部に棺を造り付ける。そして、その長側辺側に土堤状の高まりを築いて、基本的にはその内傾斜面を上段墓壇壁とする(既述)。さらにこの土堤を核にして第1次盛土と同じ手順で周囲に土盛り作業を行う(厚さは土堤の高さと一致し0.6~0.8mを測る)[第2次盛土]。この土盛りに用いた土も周濠の排土だが、この段階では周濠掘削がより深く進行して堅固な地山層に達していたため、黄灰色系の土が主に使用されている。

⑤第1主体の埋葬行為終了後、墓壇内を埋め、さらに第2次盛土の上面を均して、精選された灰色土を薄く敷き詰め(厚0.05~0.2m)整地する[第2次整地土]。この整地層は、調査時点では棺の腐朽にともなう陥没で棺上部分がU字形に大きく乱れていた。

⑥第2次整地土の上に再び黄色系の周濠排土を用いて土盛りし、一旦墳丘を完成させる(現状での最大厚さ0.65m)[第3次盛土]。この盛土作業は、比較的レベル基調に行われ、そこに土壇や堤状の高まりは認められない。墳頂における整地層も想定されるが、削平されて残存しない。第2・3主体は、既述の通り、この墳頂部を掘り込んで営まれる。

このようにして完成した墳丘は、基本的には1段目墳丘は、周濠掘削で内方に掘り残された円形基台を特に整形することなくそのまま利用し(高さ1.5m)、2段目墳丘は全て盛土で築成され(現存高さ2.0m)、墳丘の総高は周濠底から現存3.5mを測ることとなる。

3. おわりに

今回の調査成果および若干の問題点を列挙すると以下の諸点に要約できる。

(1)古墳は、丘陵尾根上に立地するが、その環境が平坦地形のため、平地部の古墳と同じ原理で築造されている。すなわち、完周する周濠を有し、基底径26mを測る墳丘(円墳)は2段築成で、その多く(墳丘総高の約2/3)が周濠掘削の際の排土を利用した盛土で構築される。

(2)外部施設として1段目墳丘テラスに1重の埴輪列、2段目墳丘斜面に葺石が施されるが、墳丘面の流出によりその遺存状態はよくなかった。

(3)墳頂部(墳丘中央部)に主軸を南北に揃えた埋葬施設が面的にみると東西に3基並列している。いずれも木棺直葬形式の堅穴系埋葬施設で、西棺→中央棺→東棺の先後関係が判明した。

(4)墳丘の断面観察によると、土塁や土壇を核としてそれに寄りかけるように小単位の土を重ね置きして順次周辺域に拡幅し、一定量に達するとその上面を水平に均すことで完結する工程(作業単位)が認められる。そして、この手順を上方に3回繰り返すことで墳丘(2段目墳丘)が構築されていることがわかった。また、内部主体は、異なった高さに重層的に設けられ、その構築面は、上記の墳丘土盛り工程面に対応することが判明した。すな

わち、第1主体と第2・3主体の構築面には約1mの高低差があり、前者が第1次盛土工面を基礎に構築された後(構築墓墳)、上位に2単位相当の土盛り工程が付加され、完成した墳丘頂部に後二者が掘り込まれる(掘り込み墓墳a類)という関係が明らかとなった。

(5)埋葬施設の構造やその付属施設(枕状施設の使用)に非畿内の要素が散見される。具体的には、第1・3主体の棺の構造と枕状施設に認められる。すなわち、前者(第1主体)の場合、棺が底板の省略や長側の複数板の使用に示されるように、外部で組み上げることが不可能な構造を採り、かつ自然石による枕石を使用している点に顕著に認められる。また、第3主体では、棺の両小口を礫塊で閉塞し、円筒埴輪を枕に転用している点が畿内中枢部においては稀有な構造と捉えることができる。とりわけ、第1主体の木棺は、容器として機能する「棺」というよりは、むしろ遺骸を取り囲んで保護し、副葬品などを収容する空間を確保する「囲い」というべきもので、あえて構造的な類例を求めるならば、板状石材を用いて箱(室)状に組み付ける「箱式石棺」に近似する。ところで、古墳時代における箱式石棺の分布域の一つとして、山陰地方東部が挙げられる。当地においては、こうした石棺に他ではみられない枕状施設(自然石や土師器を転用したもの)^(注10)を付設する例が多く、両者が密接不可分に結び付いた葬制における一つの文化圏を形成している。さらにこの地域の東部に位置する兵庫県豊岡市を中心とした地域では、箱式石棺の系譜をひく木棺がみられる。このような「箱式木棺」とでも呼ぶべき埋葬施設は、棺材の変化に呼応するごとく、小口側に副室を付設するかたちで長大化する^(注11)。こうした形態の木棺の分布はまた、隣接する丹後・丹波地域に散在的に拡大するが、結果として、より広範地域にまでは波及しないようである。このようななかで、西山塚古墳の場合、畿内中枢部にあっては異質ともいえるべきこうした山陰東部系の埋葬施設構造の影響を多分に受けている。一般に棺の構造がヤマト王権の葬制規制の対象外であり、かつ出自集団の伝統的葬法を反映しているとするなら、あるいは、西山塚古墳の被葬者の出自が彼地に求められるのかもしれない。

(6)古墳の築造時期に関しては、各埋葬施設の時期差も考慮しなければならないが、副葬品の内容やその組成、豊富な埴輪資料などから、総じて5世紀の後半代に納まるものと考えられる。

(いが・たかひろ=当センター調査第2課調査第3係調査員)

注1 和田晴吾氏は、竪穴系埋葬施設を「墓墳あり」と「墓墳なし(無墓墳)」に区分し、前者を構築手法の違いにより「掘込墓墳」と「構築墓墳」に分類した。さらに「掘込墓墳」については、墳丘の築成過程のどの段階で設定したかという基準で、a類(墳丘が完成した段階)、b類(墳丘構築途中)、c類(墳丘構築前)に細分された(和田晴吾「葬制の変遷」都出比呂志編『古代史

復元』6 講談社 1989)。

- 注2 福永伸哉氏は、いわゆる組合式木棺の四辺の側板材の平面的な組み合わせ方式について、以下のよう分類されている。A型…両側板が小口板を挟んでさらに棺長軸方向に突出するもの、B型…両小口板が側板を挟んでさらに棺短軸方向に突出するもの、C型…側板と小口板が規則的に組み合わせず井桁状を示すもの、D型…側板も小口板も突出せず箱形になるもの(福永伸哉「木棺墓」金關 恕・佐原 真編『弥生文化の研究』8 雄山閣 1987)。
- 注3 この盾は、通有にみられる獸革を素地とした置盾で、木柁骨(陥没溝として確認できた)の上に革を張ってその表面を粗い糸で刺繍して黒漆で塗り固めたものである。本例の場合、盾面の縁取りと文様区を画する綾杉文帯の遺存状態が比較的良好であった。現在までに革製漆塗盾の検出例は80例余りを数える。
- 注4 鉄鉾先は、臼杵氏の分類の「広鋒鑄造り」タイプで、袋端部は山形袂を有する(臼杵 勲「古墳出土鉄の分類と編年」『日本古代文化研究』第2号 1985)。
- 注5 鉄刀の茎尻は、「隅袂尻」(隅を弧状にしてえぐり落としたもの)を呈する(臼杵 勲「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 1984)。
- 注6 絹見安明氏は、山陰地方に顕著な枕状施設のうち、石を用いたもの(枕石)を5類に分類されているが、本遺跡のように自然石3個を用いた例は、同氏の類型からはもれる(絹見安明「古墳の埋葬施設における枕の使用について—鳥取県・長瀬高浜古墳群を中心にして—」『史想』第21号 1988)。
- 注7 刀・剣ともに把縁部分に突出する漆膜(把縁突起・柱状突出部)が認められ、置田雅昭氏分類のA類の把装具の可能性もある(置田雅昭「古墳時代の木製刀把装着具」『天理大学学報』第36巻第3号 1985)。
- 注8 西群は鍔身が小さく片逆刺を有するものが多いのに対し、東群はより鍔身が長く片逆刺をもつものは少ない傾向がある。
- 注9 矢羽根を篋に装着する場合、その前後を繁卷きして固定するが、古い例は繁卷部分のみ黒漆を塗り(雪野山古墳例・谷内21号墳例など)、古墳時代中期後半以降になると、本例のように本矧・末矧野間も漆で塗りつぶすようになるようである(円照寺墓山1号墳例・七廻鏡塚古墳例)。
- 注10 瀬戸谷皓「再び土師器転用枕について」(『よみがえる古代の但馬』 但馬考古学研究会) 1981
- 注11 豊岡市の立坂106号、北浦18号墳、和田山町の中山23号墳など。

近畿地方の弥生勾玉

小山 雅 人

1. はじめに

勾玉は、鏡や武器などと共に古墳の副葬品の重要な品目である玉類の中でも中心的な位置を占め、装飾品であると同時に、その形態から極めて呪術性の強い遺物と考えられる。また、勾玉は、古墳文化が弥生文化から受け継いだ遺品であるにとどまらず、弥生勾玉自体も、縄紋時代早期～前期初頭以来の伝統を引き継いでおり、数千年の歴史をもつ希有の存在である。

弥生時代は、勾玉が縄紋文化の原始的かつ多様な形態から、古墳の副葬品に見られるような定型化された形態への移行期に当たる^(注1)。また、この時期の勾玉の出土遺構や分布地域などには特徴的な変遷が見られ、古墳時代の成立問題に関しても、墳墓や鏡などと共に、その解明のための重要な視点となると思われる。と言うのは、勾玉は古墳時代においては、時の権力者たる古墳の被葬者に伴って出土するのが常態であり、弥生時代にその開始が認められるからである。古墳時代に全国的に広がった定形勾玉が弥生時代の段階で、いつ、どこで出現し、どのように分布を広げていたかを見極めた木下尚子氏の論考は、古墳時代の萌芽の少なくともひとつの要素がどこにあったかを示唆している^(注2)。一方、縄紋時代後期以来、勾玉の多くは翡翠(硬玉)で作られており、これが新潟県糸魚川市周辺という一地点から全国に広がったとすれば、この交易の主体となった集団は、当時の経済的・宗教的、そして恐らく政治的な勢力と結び付いており、翡翠の出土地の分布はその勢力が奈辺にあるかを示すであろう。筆者は前稿で、弥生時代の前半期に於ける北部九州の圧倒的優位と、後期～庄内式期に於ける吉備周辺の卓越を確認したが^(注3)、本稿は、古墳時代の政治・文化の中心となった畿内地方が、弥生時代にはどのような位置を占めていたかを、勾玉というささやかな遺物から見てみようとするものである。

尚、本稿では基本的にはⅠ～Ⅵ期という時期区分を用いる。Ⅵ期はいわゆる庄内式期を指すが、報告書等の「弥生後期終末～古墳初」などと報告されたものをこの時期に入れたりしているのが、土器編年という布留式古段階も一部含んでいるであろう。また、本稿では、未成品は扱わず、玉石製の製品に限り、土製勾玉は除いている。

II. 近畿地方の弥生勾玉

全国の弥生勾玉の出土数は、手元の資料では、230遺跡からの約600点あるが、近畿地方は38遺跡の約85点で、およそ14%を占めている(第1図)。

1. 但馬・播磨地方

豊岡市立石墳墓群出土の翡翠製勾玉^(注4)(1)は、長1.8cmでやや丸みを帯びているが、整美な半円状勾玉である。時期はⅥ期前後に位置づけられている。但馬ではこれが唯一例であるが、Ⅴ～Ⅵ期の台状墓が多く分布する地域であり、今後の増加が期待される。

播磨地方では、龍野市白鷺山遺跡の箱式石棺から7点の勾玉の出土が伝えられている^(注5)。

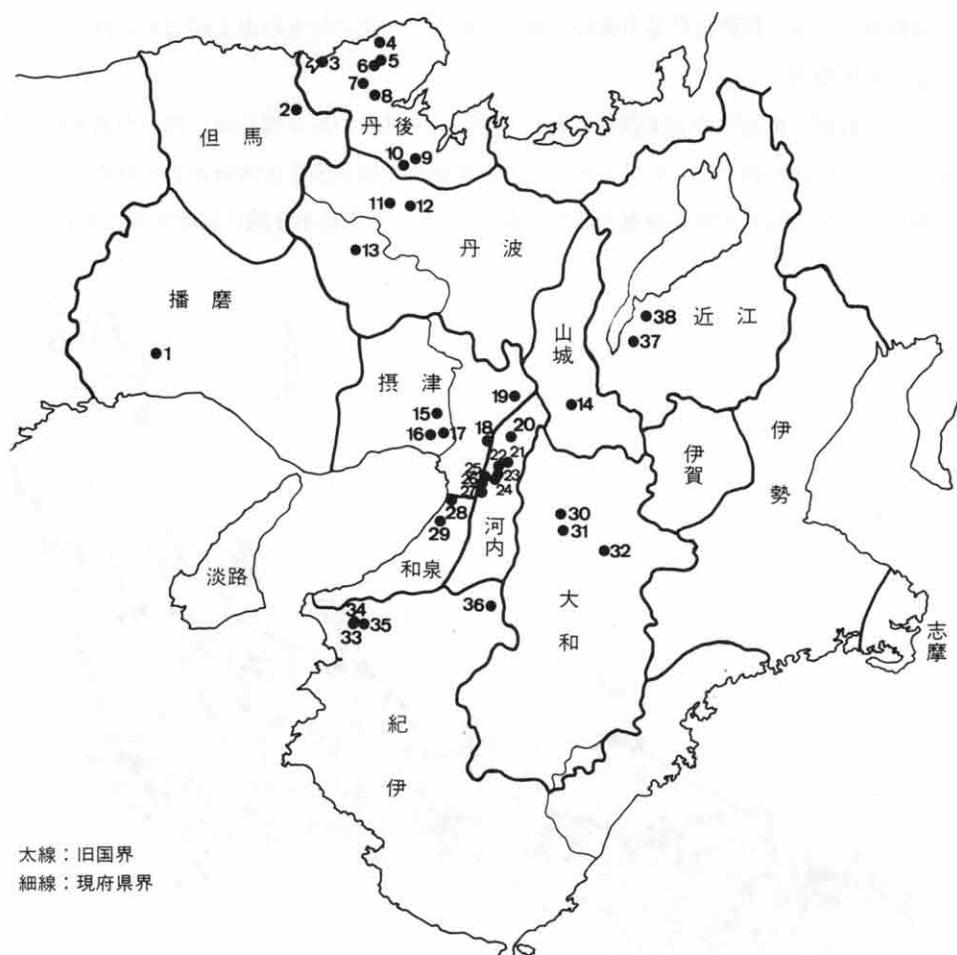
2. 丹後地方

久美浜町函石浜遺跡で表面採集された小形(1cm前後)の翡翠製品^(注6)は、何点かある中の少なくとも半円状の数点(2・3)は、その大きさや形態が福井県下屋敷遺跡出土例^(注7)のいくつかに類似し、また同じく表面採集された土器から、恐らくⅠ期かⅡ期に位置すると思われる。



第1図 弥生勾玉の分布(全種・全期間)

ごく最近出土した弥生町奈具谷遺跡^(注8)の流紋岩製の1点(6)は、板付型に分類される。形態的には福岡県三雲深町遺跡^(注9)の滑石製品に似ている。奈具谷のもう1点(5)は、大形の丁字頭勾玉として近畿地方では初の出土例となった。ただ、この種の勾玉が翡翠・ガラス(第4図62・7・14・15)・石英(第4図8)で作られるのに対して、奈具谷例の材質が軟らかい半花崗岩である点は、やや異質な感じを受ける。峰山町途中ヶ丘遺跡^(注10)の翡翠製品(7)は、3.6cmを測る中形品であるが、頭尾共に尖った不定形である。出土した溝の土器はⅢ・Ⅳ様式が混じると報告されている。方形周溝墓かと見られるⅣ期の溝から出土した志高遺跡例^(注11)(8)



第2図 近畿地方の弥生勾玉出土遺跡分布図

- | | | | | | | |
|----------|----------|---------|-----------|---------|----------|---------|
| 1. 白鷺山 | 2. 立石 | 3. 函石浜 | 4. 大山 | 5. 奈具谷 | 6. 坂野丘 | 7. 途中ヶ丘 |
| 8. 三坂神社 | 9. 志高 | 10. 桑飼上 | 11. 興 | 12. 青野西 | 13. 七日市 | 14. 芝ヶ原 |
| 15. 加茂 | 16. 武庫荘 | 17. 田能 | 18. 森小路 | 19. 安満 | 20. 高宮八丁 | 21. 鬼虎川 |
| 22. 巨摩庵寺 | 23. 山賀 | 24. 亀井 | 25. 加美 | 26. 喜連東 | 27. 瓜破北 | 28. 四ツ池 |
| 29. 池上 | 30. 唐古・鍵 | 31. 坪井 | 32. 見田・大沢 | 33. 西田井 | 34. 北田井 | |
| 35. 吉田 | 36. 血縄 | 37. 下鉤 | 38. 市三宅東 | | | |

	但馬	丹 後	丹 波	山 城	摂津	河内・和泉	大和	紀 伊
I 期		面石浜 2 3 4			山 賀 43 高宮八丁 安 廣 37			
II 期					加 茂 38 44 45 46 47			
III 期		奈具谷 5 6			田 能 39		坪 井 54	
IV 期		池の中ヶ丘 7 8 志 高 21	興 21		安 廣 42 田 能 40 41 池 上 52 瓜 破 北 48 池 上 53 亀 井 49 吉 田 50 葛 連 東 51	唐古・磯 ● 唐古・磯 ● 55	北 田 井 ●	
V 期		大 山 9 10 三坂神社 11 12 桑 岡 上 13 坂 野 丘 20 14-19	七日市遺跡 22 23 24 25 26 青 野 西 27 28		芝ヶ原古墳 29-36			血 綱 57 西 田 井 58 吉 田 ●
VI 期	立 石 1						見田大沢 56	

0 5cm

第3図 近畿地方の弥生勾玉の変遷

も翡翠製品と思われるが、東日本的な空豆形の半球状を呈する。

V期前半になると大山墳墓群でガラス製品が出現する。3点中の2点(9・10)は志高遺跡例に似た空豆形である。^(注12)最近調査された大宮町の三坂神社墳墓群の3,000余点ガラス玉の中には、小玉・管玉と共に3点の勾玉も含まれている。^(注13)3号墓第10主体の勾玉(12)は、尾部の屈曲が大きい定形式であり、形態的には岡山県黒宮大塚例^(注14)に似ている。同第2主体の2点のうちの1点(13)は、唐古・鍵などに類例のある下膨れの変形半球状勾玉に分類されよう。V期後半から末と思われる坂野丘遺跡から管玉・小玉多数と共に中形品1・小形品5の定形式ガラス勾玉(14～19)が出土した例はよく知られている。^(注15)

丹後地方は、近畿地方でも特に弥生勾玉の出土が多い地方として注目されよう。

3. 丹波地方

表面採集品であるが、京都府福知山市興遺跡の翡翠製品^(注16)(21)は空豆形の中形品である。採集地のごく近くで行われた発掘調査の結果からすると、IV期の可能性があるが、無論確証はない。この地方の勾玉の上限は、確実な例では今のところV期後半かVI期で、兵庫県春日町七日市遺跡の土壙や住居跡などから5点(22～26)が出土している。^(注18)半球状と定形式の中間的な形態で、いずれも2cm未満の小形品である。住居跡出土の1点(24)が灰白色石であるほかは翡翠製品である。京都府綾部市青野西遺跡例は布留式期に下がるかも知れないが、2点のうち、特に興味を引くのは翡翠製の獣形勾玉(27)である。この形態の勾玉は縄紋時代以来のものであるが、弥生時代ではI～II期に多く、IV期には殆ど姿を消すのである。岡山県矢野治山墳丘墓の弥生最末期の獣形勾玉^(注20)が極めて北部九州的な整美な形態であるのに対して、青野西例が後述する大阪府の高宮八丁遺跡や鬼虎川遺跡の例に見られるいびつな形態に近い点に注意しておきたい。

4. 摂津・山城地方

大阪府高槻市安満遺跡の前～中期とされる半球状の翡翠製品^(注21)(37)を最古例とする。中期では、兵庫県尼崎市武庫荘遺跡や加茂遺跡(38)でも非常に小形の半球状翡翠製品が知られているが、^(注22)1点のみ安満遺跡にガラス勾玉^(注23)(42)がある。尼崎市田能遺跡の翡翠製品^(注24)3点(39～41)は、中期から後期にかけての方形周溝墓に関連するらしいが、Ⅲ～IV期とされる1点(39)は、2.3cmの小形で、扁平であるにも拘わらず丁字頭である。森貞次郎氏は、「頭部の刻線は幅広く深くて、縄文勾玉に見る頭部の花形のくびれの手法に近い」と評している。^(注25)北部九州のⅡ～Ⅲ期の甕棺以後、V～VI期の岡山県の墳丘墓、そして古墳時代前期の古墳に連なる定形式丁字頭勾玉(第4図参照)とは、若干系譜が異なるのであろう。京都府城陽市の芝ヶ原古墳は出現期の古墳としてよく知られているが、主体部の8点もの翡翠製品^(注26)(29～36)の一括出土は、西日本では希有の例である。また、芝ヶ原の勾玉個々の形

態をみれば、同時期の岡山県などの出土例よりも、丹波の七日市遺跡や北陸地方の玉作り遺跡出土例に近いようである。摂津・山城地方では、大阪府茨木市の東奈良遺跡でガラス勾玉の鑄型が出土しているにも拘わらず、出土例の殆どが翡翠製品である点、やや意外な気もする。

5. 河内・和泉地方

いわゆる畿内地方での最古の弥生勾玉は、東大阪市山賀遺跡のⅠ期中頃とされる土器溜りから出土した小形の翡翠製品^(注27)(43)である。長さ1.25cmを測り、文字通りコマ形をしている。木下尚子氏は菜畑型としているが、やや亜種である。Ⅰ～Ⅱ期の例としては、寝屋川市高宮八丁遺跡の獣形勾玉1点^(注28)(44)、東大阪市鬼虎川遺跡^(注29)の獣形1点^(注30)(45)・半珠状大小2点^(注31)(46・47)の計4点が挙げられる。いずれも翡翠製品である。

今のところ、この地方では確実なⅢ期の勾玉は確認出来ず、第二の盛期はⅣ期末からⅤ期である。大阪市加美遺跡^(注32)(Ⅳ期末)・東大阪市巨摩廃寺遺跡^(注33)(Ⅴ期初)・大阪市喜連東1号墓^(注34)(51; Ⅴ期末)などの周溝墓出土例に、大阪市瓜破北遺跡^(注35)(49; Ⅴ期前半)の住居跡出土例や堺市池上遺跡の包含層出土品^(注36)(53)を加えることができる。形態的には、半珠状勾玉は既に一掃され、定形式に近い勾玉に変わっている。材質は、加美・巨摩廃寺・池上がガラス、喜連東・瓜破北が碧玉と、翡翠製品は池上遺跡の方形台状墓出土例^(注37)(52)しかない。また、八尾市亀井遺跡のⅤ期の層から長さ4.8cmの石製の板付形勾玉^(注38)(50)が出土している。

6. 大和地方

橿原市坪井遺跡の第三様式中心の包含層で採集された1.7cmの翡翠製品^(注39)(54)は、Ⅲ期とすれば大和では最古となる例であるが、平面形が極めて定形的であるにも拘わらず、断面が扁平である。田原本町唐古・鍵遺跡のⅣ期の井戸(?)からも頭部の扁平な勾玉が出土している。この遺跡では中～後期とされるガラス勾玉^(注40)(55)が知られていたが、異形の半珠状を呈する長さ1.1cmの小形品である。免田野町見田大沢4号墳の翡翠勾玉^(注41)(56)は、庄内式期とすれば、翡翠製であることやその形態など古墳出現期の勾玉の貴重な一例である。

大和地方の弥生勾玉は4例に過ぎず、質量ともに貧弱な印象は否めない。

7. 紀伊地方

集落遺跡から5点が出土している。最古例はⅣ期の和歌山市北田井遺跡2号住居跡の尾部が欠損した例である。材質や大きさは報告されていないが、写真によれば定形式かそれに近い形態である。後期になると、橋本市血縄遺跡^(注42)から蛇紋岩製^(注43)(57)、和歌山市西田井遺跡^(注44)の住居跡から翡翠製^(注45)(58)の定形式大形勾玉が出土している。Ⅴ期の岩手町吉田遺跡は、蛇紋岩製の勾玉製作遺跡であるが、未成品に混じって定形式の整美な製品が出土している^(注46)。徳島県の蛇紋岩勾玉製作遺跡との関連が考えられる。

8. 近江地方

野洲町市三宅東遺跡の中期の碧玉製勾玉のほかに、栗東町下鈎遺跡で中～後期の翡翠製品が出土したと聞く。詳報を待ちたい。

III. 近畿弥生勾玉の形態

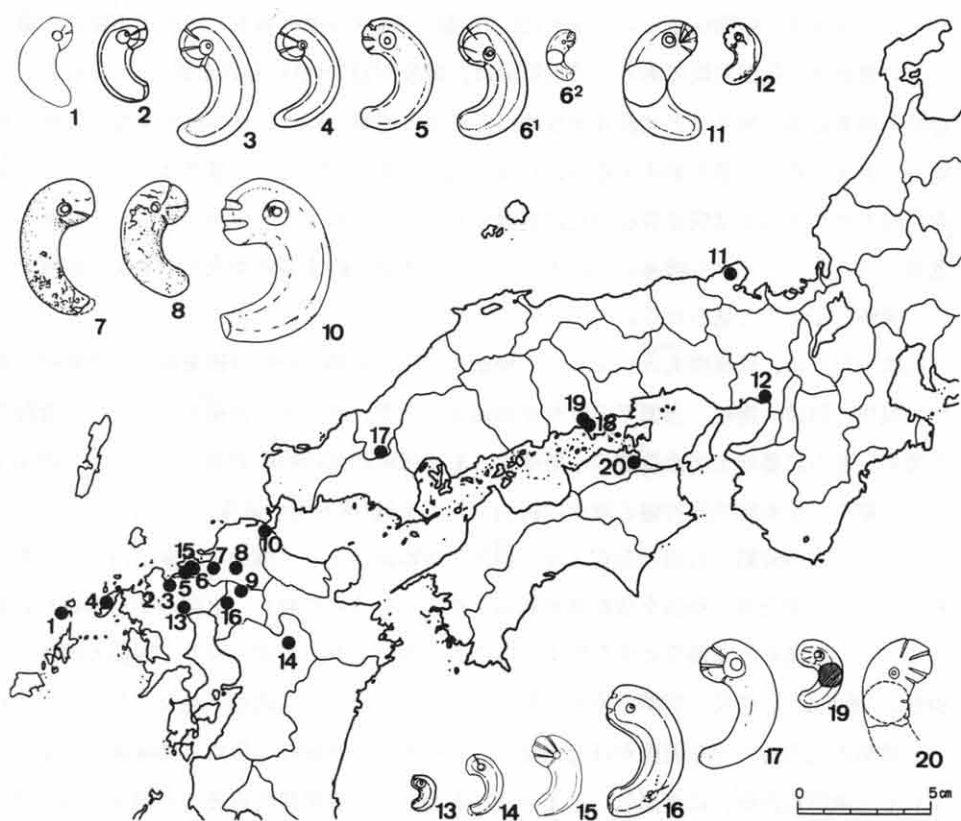
縄文系勾玉は、①緒締形と②獸形(櫛形)の勾玉が弥生時代に生き残っているが、九州以外では専ら獸形勾玉に限られるようである。近畿地方では、河内高宮八丁・鬼虎川・丹波青野西の各遺跡に見られる。しかし、いずれも九州の宇木汲田15号甕棺(Ⅱ期)^(注47)や吉武高木3号木棺(Ⅱ期初)^(注48)、あるいは備前の矢藤治山墳丘墓(V期末)の諸例のような整美なものではない。

③半帛状勾玉は、朝鮮半島の無紋土器時代の、多くは天河石製の半月状や半帛状勾玉^(注49)がその直接の原型であろう。稲作開始前後に伝わったらしく、玄海灘に面する筑前今川遺跡(Ⅰ期)の天河石製半月状勾玉^(注50)は、そのあたりの事情を雄弁に物語っているかのようである。以後、半帛状勾玉は、弥生勾玉の典型として、最も出土例が多く、近畿地方でも主流をなすが、中部地方以東ほどには大勢を占めていない。丹後函石浜の小形品や河内鬼虎川の大小2点などがその代表例であるが、Ⅳ期頃以降は、変形的な形態に変わっていく。志高・大山などの丸みを帯び、腹部のえぐりが浅い空豆形は、駿河有東遺跡・安房健田遺跡(第5図18)^(注51)など各地に類品があり、下総椎津茶ノ木遺跡の琥珀製品もこの空豆形に分類されよう。唐古・鍵や三坂神社例は、下半部が大きく、背部から尾部への線が直角を成す下膨れ形で、阿波拝原(第5図11)^(注54)や越中畠山などの遺跡に類例がある。

④板付型勾玉は、木下尚子氏の設定で、森貞次郎氏の牙形^(注57)を含め、板状の主に滑石製品を一括するものである。近畿地方では、丹後奈具谷遺跡と河内亀井遺跡に例がある。また、九州の菜畑遺跡^(注58)と同様の小形品が丹後函石浜遺跡で拾われている。

縄文晩期後半あるいは弥生時代早期に出現する⑤菜畑型勾玉は、菜畑遺跡^(注59)の他に三雲加賀石・長門綾羅木などの前期の遺跡から出土している。近畿地方では河内山賀遺跡(Ⅰ期)から小形品が出ており、類似例が丹後の志高遺跡に1点(Ⅳ期)^(注62)ある。この菜畑型から中期前半の⑥丁字頭勾玉への変化ないし発達については、木下尚子氏の論考^(注63)に詳しいが、丁字頭勾玉23点中17点が九州で出土しているのに対し、中国四国地方では後期以降の4点、近畿地方でも中期例が2点出土しているに過ぎず、丁字頭勾玉の出現と盛行は、北部九州が舞台になっている(第4図)。

⑦定形式勾玉については、本稿では詳論できないが、この形態は菜畑遺跡^(注64)の土製勾玉に見られるように、かなり古くから存在したようで、それが中期中頃の北部九州で勾玉の理



第4図 弥生時代丁字頭勾玉の分布図

想的形態として採用されたというのが、いわゆる定形化の実態ではなかろうかと考えている。定形化後の普及は、一足早い半環状勾玉の広範な分布とは対照的に、九州以外では中期には散見される程度で、瀬戸内地方でⅤ・Ⅵ期には定着するが、近畿地方以東では変形した半環状勾玉と共存しており、定形式が一般化するの、庄内式期より後である。

Ⅳ. 近畿弥生勾玉の材質

弥生時代の前期・中期の勾玉は、福岡県博多湾沿岸の滑石製品(Ⅰ期)・山口県の碧玉製品(Ⅰ～Ⅱ期)・北部九州のガラス製品(Ⅲ～Ⅳ期)・千葉県 of 滑石や琥珀製品(Ⅳ期)などの局地的な分布を別にすれば、全国的には翡翠製品が殆どであり、近畿地方でも1～2点の中期に遡るかもしれないガラス製品以外は、翡翠製である。ところが、後期から庄内式期になると、勾玉の材料は多様化する。翡翠と共にガラス・碧玉・蛇紋岩・滑石などの製品が広く分布し、かつ交錯するようになるのである。ここでは近畿地方に関連する丹後のガラス勾玉と紀伊の蛇紋岩製品をとりあげる。

ガラス勾玉は、中期中頃ないし後半(Ⅲ/Ⅳ期)の福岡県須玖岡本^(注65)と三雲南小路^(注66)の王墓クラスの甕棺出土品が初現^(注67)である。後期以降は、博多湾沿岸地域(春日市周辺)を中心として、壱岐・熊本北部・鞍手など北部九州各地に広がると同時に、主に日本海沿岸地方と摂河泉地方に出土するが、最も集中するのは丹後の北部である(第5図)。筆者は、少なくとも後期以降のガラス勾玉は翡翠製品不足に起因する代用品と考えているが、丹後の3遺跡・5遺構・12点は、いずれも墳墓から出土しており、後期に始まる鉄製武器や玉類の副葬と大いに関係していると思われる。

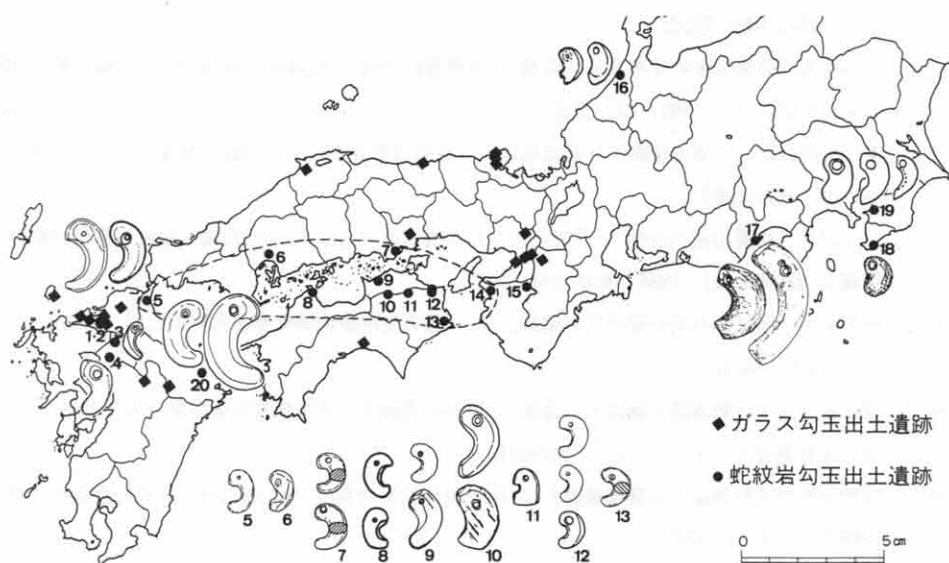
蛇紋岩勾玉は、菅原康夫氏^(注68)によって、後期から庄内式期の紀伊吉田遺跡や阿波稲持遺跡での製作と阿波・讃岐・吉備での分布が指摘されたが、伊予唐子台遺跡^(注69)や安芸恵下遺跡^(注70)の土壌墓、さらに豊前上清水遺跡^(注71)の小児甕棺にもほぼ同形態の蛇紋岩製品があり、Ⅴ期後半からⅥ期ないし布留式期初頭の瀬戸内海沿岸地方全域(第5図の破線内)に広がっているようである。この時期、吉備の黒宮大塚^(注72)・楯築^(注73)・鑄物師谷1号^(注74)・楯津・矢藤治山などの堅穴式石室をもつ墳丘墓が優品を含む翡翠製品を持っているのに対し、上記の小形の蛇紋岩製品は、中小規模の土壌墓などから出土することから見ても、丹後のガラス製品と同様に、副葬品(着装品)の必要と翡翠の不足に起因する代用品ないし二流品と見なされよう。これら2種類の代用品の分布範囲がほぼ完全に分かれている状況は、極めて興味深く、またいずれも古墳時代前期には衰退してしまう点もあわせ、「古墳時代前夜」の何かを語っている筈である。

V. 近畿弥生勾玉の変遷

弥生時代各時期の近畿地方の勾玉の特徴をまとめ、結語に代えたい。

Ⅰ期(前期)の例は、河内山賀遺跡1点にほぼ限られるので、Ⅱ期(中期前半)まで広げてみると、丹後と河内が北部九州の筑前・肥前や長門・出雲・越前などと共に、勾玉を出土する数少ない地域のひとつであるといえよう。墳墓出土品が既に北部九州・長門・出雲・越前にあるが、近畿地方では現在のところ知られていない。

Ⅲ期(中期中頃)の確実な例は、丹後の奈具谷遺跡の2点のみで、勾玉はごく希な遺物となる。ガラス勾玉としては、Ⅳ期に下がるかも知れない安満遺跡と唐古・鍵遺跡の例が、近畿での最古例である。また、奈具谷遺跡(Ⅲ期)と田能遺跡(ⅢかⅣ期)の丁字頭勾玉も、近畿では最も古い。弥生時代を通じて、ガラス勾玉・丁字頭勾玉の出土は、近畿の上記の遺跡が東限となっており(第4図・第5図)、形態的な完成度(定形式化)を別にすれば、北部九州に於けるその初現(丁字頭勾玉はⅡ期、ガラス勾玉はⅢ期ないしⅣ期)から、さほどには隔たっていない。ちなみに、中国・四国地方では、丁字頭・ガラスともⅤ期以降のよ



第5図 弥生時代V～VI期のガラス勾玉と蛇紋岩勾玉の分布

うである。尚、副葬品である確証はないが、田能遺跡での周溝墓溝からの出土例は、墳墓に関連する勾玉として近畿では先駆的である。

IV期末からV期(後期)になると、丹後の台状墓や河内の周溝墓から副葬品ないし着装品として勾玉が他の玉類と共に出土し始める。材質は翡翠よりも、丹後ではガラスが多く、河内ではガラスと碧玉である。特に、丹後の大山・三坂神社・坂野丘の台状墓群のガラスを主とする夥しい玉類は、北部九州をも凌ぐ程である。

VI期とした庄内式期は、古墳時代初頭とする研究者が特に最近は多いようである。筆者自身もそのように考えているが、こと勾玉に関しては、全国の出土例を見れば、弥生時代の延長という感が強い。近畿地方のこの時期の勾玉の出土例は、意外に少ない。山城の芝ヶ原古墳の例は、この時期の近畿地方の翡翠製勾玉が、IV～V期の北九州やV～VI期の中国四国地方に比べて東日本的であり、古墳時代と言うより弥生時代的であることをよく示している。大和の纏向古墳群などの出現期古墳の勾玉がどのようなものであるか、甚だ興味深いところである。

(こやま・まさと=当センター調査第2課調査第3係長)

注1 森貞次郎「弥生勾玉考」(『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』 同書刊行会) 1980、307～341頁。尚、この先駆的論考には、発表時に知られていた殆どの弥生勾玉が実測図で集成されている。以下、本稿では実測図番号を付して、「森(00)」という形で引用する。

注2 木下尚子「弥生定形勾玉考」(『東アジアの考古と歴史』中(岡崎敬先生退官記念論集) 同朋

- 舎) 1987、540～591頁
- 注3 小山雅人「弥生勾玉の分布とその変遷」(『究班』(埋蔵文化財研究会15周年記念論文集) 埋蔵文化財研究会) 1992、25～32頁
- 注4 瀬戸谷皓ほか『北浦古墳群・立石墳墓群』 豊岡市教育委員会 1987、第1分冊73頁、第54図35、第3分冊図版25
- 注5 甲斐昭光「白鷺山箱式石棺」(『定型化する古墳以前の墓制(第24回埋蔵文化財研究会資料)』埋蔵文化財研究会) 1988、第Ⅱ分冊、47頁
- 注6 梅原末治「港村函石浜石器時代ノ遺跡」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊 京都府) 1920、160～162頁
- 注7 富山正明『下屋敷遺跡・堀江十楽遺跡』(福井県埋蔵文化財調査報告第14集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター) 1988、第29図10～13
- 注8 『弥栄町奈具谷遺跡・奈具岡遺跡』(京埋セ現地説明会資料 No.92-10) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992
- 注9 柳田康雄ほか『三雲遺跡Ⅱ』(福岡県文化財調査報告書第60集 福岡県教育委員会) 1981
- 注10 田中光浩ほか『新治地区圃場整備に伴う途中ケ丘遺跡発掘調査概報(Ⅱ)』(峰山町文化財調査報告第6集) 1981、30頁、第25図1
- 注11 吉岡博之『志高遺跡-昭和58年度カキ安・舟戸地区の調査概要』(舞鶴市文化財調査報告第7集 舞鶴市教育委員会) 1984、6頁；実測図は現地説明会資料による。
- 注12 平良泰久・黒田恭正ほか『丹後大山墳墓群』(丹後町文化財調査報告第1集 丹後町教育委員会) 1983、69～70頁、第55図、巻首原色図版
- 注13 『有明古墳群・三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群現地説明会資料』 大宮町教育委員会 1992
- 注14 森(78)；間壁忠彦・間壁茂子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』13 1977、16頁、図10
- 注15 釋 龍雄ほか『坂野 坂野丘遺跡・坂野4号墳発掘調査報告書』(弥栄町文化財調査報告第2集 弥栄町教育委員会) 1979、25～26頁、第8図、[巻頭図版]
- 注16 堤圭三郎・久保哲正「観音寺遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-1)』 京都府教育委員会) 1980、209頁、第72図；この勾玉の法量や材質については中川淳美氏に丁寧な御教示を賜った。
- 注17 田代 弘「興遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第17冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992、8～137頁
- 注18 種定淳介『七日市遺跡(Ⅰ)』第2分冊(近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XⅡ-2 春日町) 1990、87頁、図版147・229
- 注19 近沢豊明「青野西遺跡第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第16集 綾部市教育委員会) 1989、65頁、第21図、図版第37
- 注20 『毎日新聞』 1991年3月11日付

- 注21 木下尚子、注2文献、第6図7
- 注22 森(46)；末永雅雄・石野博信『摂津加茂』関西大学 1967、163～164頁、図57-3、図版第79
- 注23 森(87)
- 注24 森(57)(90)(91)；石野博信・村川行弘ほか『田能遺跡発掘調査報告書』(尼崎市文化財調査報告第15集 尼崎市教育委員会) 1982、447頁、第143図1～3、図版第72
- 注25 森貞次郎、注1文献
- 注26 近藤義行ほか『芝ヶ原古墳』(城陽市埋蔵文化財調査報告書第16集 城陽市教育委員会) 1987、22頁、第26・27図
- 注27 西口陽一・宮野淳一ほか『山賀(その3)』大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1984、本文編、43頁、第24図
- 注28 木下尚子、注2文献、注15
- 注29 瀬川芳則ほか『高宮八丁遺跡-石器編』(寝屋川市文化財資料11 寝屋川市教育委員会) 1988、253頁、図版6・82
- 注30 『鬼虎川遺跡出土遺物にみる弥生人のくらし』東大阪市郷土博物館 1983、4頁；実測図は木下尚子、注2文献第1図14、第6図4・15に拠る。
- 注31 永島暉臣・田中清美「大阪市加美遺跡の弥生時代中期墳丘墓」『月刊文化財』266、1985
- 注32 玉井 功編『巨摩・瓜生堂』大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1981、170頁、第103図、巻頭図版3
- 注33 黒田慶一「喜連東遺跡発見の方形周溝墓と方墳」(『葦火』10 大阪市文化財協会) 1987、5～8頁
- 注34 永島暉臣・田中清美「瓜破北遺跡」大阪市文化財協会 1980、60頁、図版28・42
- 注35 森(88)
- 注36 森(96)
- 注37 高島 徹・那須孝悌ほか『亀井・城山』大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1980、291頁、第285図、図版113
- 注38 森(67)
- 注39 藤田三郎『昭和62・63年度唐古・鍵遺跡第32・33次発掘調査概報』(田原本町埋蔵文化財調査概要11 田原本町教育委員会) 1989、64頁、図版54
- 注40 森(23)
- 注41 亀田 博『見田・大沢古墳群』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第44冊 奈良県教育委員会) 1982、図57、図版31
- 注42 藤丸詔八郎・笠井保夫『和歌山市北田井遺跡発掘調査概報Ⅱ』和歌山県教育委員会 1971、7頁、第17図
- 注43 松下 彰『紀ノ川用水建設事業に伴う発掘調査報告書』和歌山県教育委員会 1978、14頁、挿図1、図版第1
- 注44 土井孝之「西田井遺跡」(『弥生時代の石器-その始まりと終わり-』(第31回埋蔵文化財研究

- 集会資料 埋蔵文化財研究会) 1992、第5分冊、118頁
- 注45 林 博通・辻林 浩『吉田遺跡第2次調査概報』和歌山県教育委員会 1971、21頁
- 注46 菅原康夫「吉野川上流の勾玉製作」『考古学と技術』(同志社大学考古学シリーズⅣ) 1988、259～272頁
- 注47 森(3)；森貞次郎「宇木汲田遺跡-(7)勾玉」(『末盧国』六興出版) 1982、320頁、第163図6
- 注48 常松幹雄ほか『吉武高木』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第143集 福岡市教育委員会) 1986、9頁
- 注49 西谷 正「朝鮮先史時代の勾玉」(『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上) 1982、187～202頁
- 注50 酒井仁夫・伊崎俊秋『今川遺跡』(津屋崎町文化財調査報告書第4集 津屋崎町教育委員会) 1981、50～51頁、第28図7、図版16、巻頭原色図版
- 注51 内藤 晃「硬玉文化論」『考古学研究』第6巻第3号、1959
- 注52 白井久美子「健田遺跡」(『定型化する古墳以前の墓制』(第24回埋蔵文化財研究会[資料]埋蔵文化財研究会) 1988、第Ⅱ分冊 538～540頁
- 注53 『私たちの文化財』17 市原市文化財センター 1991、3～4頁
- 注54 菅原康夫、注46文献、268頁、図4-5
- 注55 橋本 正「小杉町囲山遺跡」(『富山県埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ 富山県教育委員会) 1972、6頁；図版第37、6
- 注56 木下尚子、注2文献、551～554頁
- 注57 森貞次郎、注1文献、316頁
- 注58 中島直幸・田島龍太編『菜畑遺跡』(唐津市文化財調査報告第5集 唐津市教育委員会) 1982、第267図12
- 注59 同上文献、第267図11
- 注60 柳田康雄ほか『三雲遺跡Ⅰ』(福岡県文化財調査報告書第58集 福岡県教育委員会) 1980、109頁；第94図1
- 注61 国分直一「呪術的造形および複葬の形跡」(『綾羅木郷遺跡発掘調査報告』第Ⅰ集 下関市教育委員会) 1981、第315図(S-2021)
- 注62 吉岡博之、注11文献
- 注63 木下尚子、注2文献、577～587頁
- 注64 中島直幸・田島龍太、注56文献、第267図04。尚、本稿では木下氏(注2文献)の「定形」と「亜定形」を区別していない。この問題については、稿を改めて考えてみたい。
- 注65 森(53)
- 注66 森(63)～(66)；柳田康雄ほか『三雲遺跡 南小路地区編』(福岡県埋蔵文化財調査報告書第69集 福岡県教育委員会) 1985、50～51頁、第35図、図版33
- 注67 生産関係遺物としては、尚、山口県菊川町の下七見遺跡から中期初めのガラス勾玉の鋳型の出土が伝えられている(アサヒグラフ編『古代史発掘'88～'90』(新遺跡カタログVol.3) 朝日新

聞社 1991、123頁)。

注68 菅原康夫、注46文献

注69 谷若倫郎「唐子台遺跡群」(『弥生時代の青銅器とその共伴関係』(埋蔵文化財研究会第20回研究集会[集会] 埋蔵文化財研究会) 1986、第Ⅱ分冊、201~203頁(5丘7号墓)

注70 植田千佳穂・青山 透『恵下遺跡発掘調査概報』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター 1980、第7図1

注71 木太久守ほか『上清水遺跡Ⅱ区』(北九州市埋蔵文化財調査報告書第100集 北九州市教育文化事業団) 1991、120頁;図版第64

注72 近藤義郎『岡山橋築遺跡』(山陽カラーシリーズ3 山陽新聞社) 1980、写真⑥

注73 宇垣匡雄「鋳物師谷1号墓」、注5文献、第Ⅰ分冊、610~613頁

注74 宇垣匡雄「檜津古墳」、注5文献、第Ⅰ分冊、626~628頁

補注1 (第4図について)

丁字頭勾玉出土遺跡の分布とその形態を集成した。実測図は、中期例を左上に、後期以降の例を右下に置いた。これを見ると、葉畑型から発達したと思われる明確な頭部をもつ(3・4)の他に、不定形な縄紋的なもの(1・12)や、尾端部の面や砲弾形の断面形など半球状勾玉の面影を残すもの(2)がある。一方、丁字の刻線も3本を原則としつつ、小形品には1本の例(13・14)があり、また、腹部にも及ぶ多数の刻線を施す異様な例(20)は、改めて勾玉の呪術的性格を認識させる。以下、出典を掲げておく。

1 (神ノ崎) 森 浩一編『列島の地域文化』(「日本の古代」2 中央公論社) 1986、口絵(写真トレース)

2・3 (宇木汲田遺跡11号・47号甕棺) 森(58・56);注45文献

4 坂田邦洋「長崎県根獅子遺跡の発掘調査」『考古学ジャーナル』79 1973、図6

5 (石崎小路)森(59);原田大六『日本国家の起源』上、三一書房、1975、第20図4

6 (三雲南小路)森(55);注66文献、第35図2。共伴したガラス勾玉12点中の1点(第4図6²)も丁字頭勾玉である。

7 (須玖岡本)森(53);注65文献

8 (豆田遺跡)森(54);森貞次郎「古期弥生式文化期に於ける立岩文化期の意義」『古代文化』13-7、1942

9 (平塚川添遺跡)『温故』(甘木歴史資料館だより) 第16号 1992、22頁

10 小方泰宏『岡遺跡』(北九州市埋蔵文化財調査報告書第82集 北九州市教育文化事業団) 1989、第52図

11・12 (奈具谷・田能) 本文参照

13 (杵島山)森(62)

14 高谷和生ほか『下山西遺跡』(熊本県文化財調査報告第88集 熊本県教育委員会) 1987、第90図

15 渡辺正気「平原弥生古墳出土の玉類について」(原田大六『平原弥生古墳 大日靈貴の墓』上巻 葦書房) 1991、第151図(1)-1~3(ほぼ同形品3点)

16 森(60);石山 勲ほか「福岡県久留米市所在祇園山・七曲山両古墳群の調査」(『九州縦貫自

自動車道関係埋蔵文化財調査報告(X X VII) 福岡県教育委員会 1979、Fig.70(祇園山古墳第1号甕棺)

17 (前立山遺跡)松浦俊一・内田律雄ほか『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』鳥根県教育委員会 1980、第43図2

18 (橋築遺跡) 注72文献

19 (鑄物師谷1号墳) 注73文献

20 (大井遺跡) 森(61)；大久保徹也「＜参考資料＞大井遺跡」、注5文献、第Ⅲ分冊、85頁
補注2 (第5図について)

弥生時代V～VI期のガラス勾玉と蛇紋岩勾玉の出土遺跡の分布と、蛇紋岩勾玉の形態を掲げた。後者の5～14は、形態的に極めて近似と思われるので、分布図では破線で分布範囲を示した。1～4・20の九州出土例はこの一群(仮に瀬戸内型蛇紋岩勾玉とでも呼べようか)に含まれるのかも知れないが、3と4はやや異質である。一方、北陸・東海東部・関東南部の諸例は、瀬戸内型とは一応無関係のようである。以下、出典を掲げる。

1 池辺元明『駿河遺跡』(福岡県文化財調査報告書第98集 福岡県教育委員会) 1992、第21図

2 森(69)；柳田康雄ほか「春日市大字上白水字門田・辻田所在門田遺跡辻田地区墓地群の調査」(『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第9集 福岡県教育委員会) 1978、第53図1

3 (北牟田遺跡) 森(39)

4 森(49)；酒井仁夫・関 晴彦「西中ノ沢遺跡の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告(X IX)』 福岡県教育委員会) 1977、Fig.43-4

5 (上清水遺跡) 注71文献、120頁

6 (恵下遺跡) 注70文献

7 渡辺 光・岡田 博ほか『百間川原尾島遺跡』2(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56 岡山県教育委員会) 1984、第305図33・34

8 (唐子台遺跡群) 注69文献

9 (彼ノ宗遺跡)・10(稻持遺跡)・11(拝原遺跡)：注44文献

12 菅原康夫編『黒谷川郡頭遺跡』I 徳島県教育委員会 1986、Fig.48

大西浩正編『黒谷川郡頭遺跡』Ⅲ・Ⅳ 徳島県教育委員会 1989、Fig.17

13 岡山真知子編『若杉山遺跡発掘調査概報－昭和61年度－』徳島県教育委員会・徳島県博物館 1987、Fig.11

14 (吉田遺跡)・15(血縄遺跡)：本文参照

16 吉岡康暢・河村好光ほか『塚崎遺跡』石川県教育委員会 1974、第22図14・16

17 森(97・98)；日本考古学協会編『登呂』東京堂出版 1978、本編 挿図第六二

18 (健田遺跡)注52文献

19 白井久美子「庚申塚1・2号墓」注52文献、541～543頁(2号墓)

20 清水宗昭ほか『舞田原』犬飼町教育委員会 1985、117～118頁、第102図3・4

中海道遺跡の再検討(2)

中 川 和 哉

C. III期(古墳時代)

a. 遺構

竪穴式住居跡 S H09 残存状態の悪い小型の竪穴式住居跡と考えられる遺構である。支柱穴が4ヶ所検出できたことから小型ではあるが住居跡とした。スクリントーン部分は焼土、炭、灰の分布で、住居外部にもその広がりが見られたことから住居の規模は検出規模より大きく残欠のみの検出である可能性もある。焼土分布域の近くから甕が出土しており、備え付けの竈の痕跡は認められなかったことから、移動式の竈の存在が想定できる。北西の方形の土坑は床面で検出できた遺構で、内部からは床面出土土器片と接合関係の認められる土器片が出土している。南北約2.7m、東西約3.1mを測る。検出面からの最大の深さは約5cmである。東西の柱間は約1.6m、南北の柱間は約1.4m。

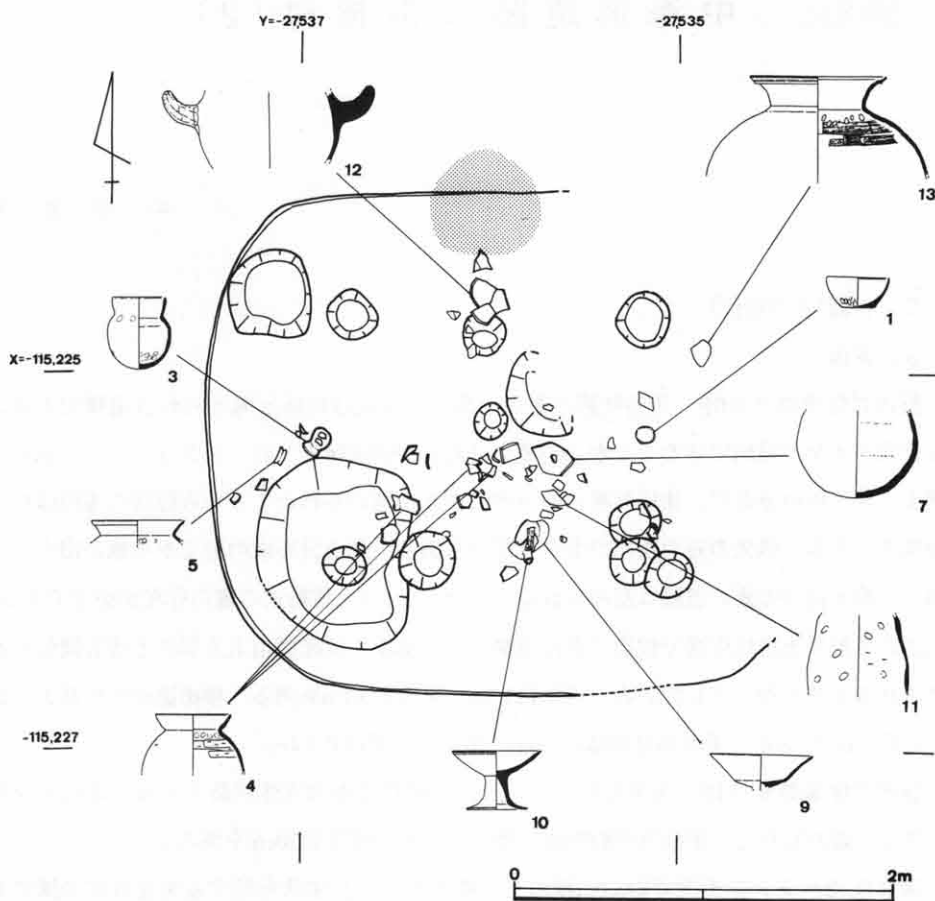
竪穴式住居跡 S H10 南半分がトレンチ外へ延びる竪穴式住居跡である。北辺中央部に焼土が認められた。東西方向約2.6m、検出面からの深さ約20cmを測る。

溝 S D13 トレンチ内で約3.0m検出した断面が「U」字状を呈する南北方向の溝である。幅約40cm、検出面からの深さ約5cmを測る。

b. 遺物

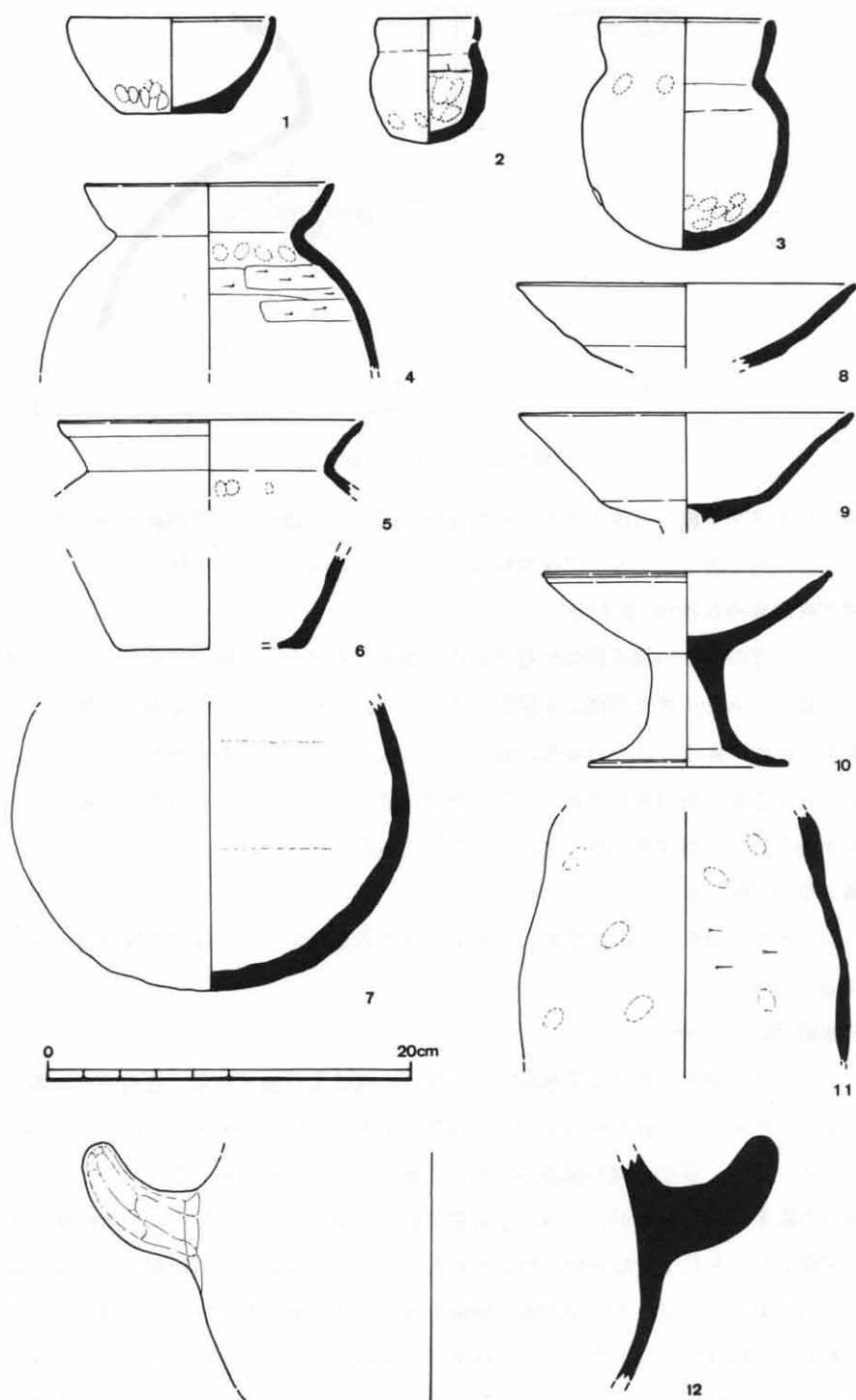
竪穴式住居跡 S H09(第2・3図)

1は、赤みの強い土師器の鉢である。内外面はナデ調整が施され、口縁端部は内面に肥厚する。2は小型の壺で内面には接合痕が残り、内外面はナデ調整が施されるが指頭圧痕が多く認められる。3は2と同型体の壺で口縁径器高は約倍である。内面には接合痕が残り、内外面はナデ調整が施される。2・3は、ともに造りが雑である。4・5は、土師器の甕である。4は、口縁部が完存しており、調整は頸部外面に強いナデを施され、内面には口縁部接合時の指頭圧痕が残り、頸部からやや下がった位置からケズリ調整が施される。胎土中には赤色斑粒を多く含む。6は、淡褐色の平底の土師器である。内外面の調整は器面の剝落によって不明である。7は、土師器の底部である。調整は内外面ともにナデである。2・3と調整や形状が類似することから同様に壺の底部と想定できる。府道を隔てて

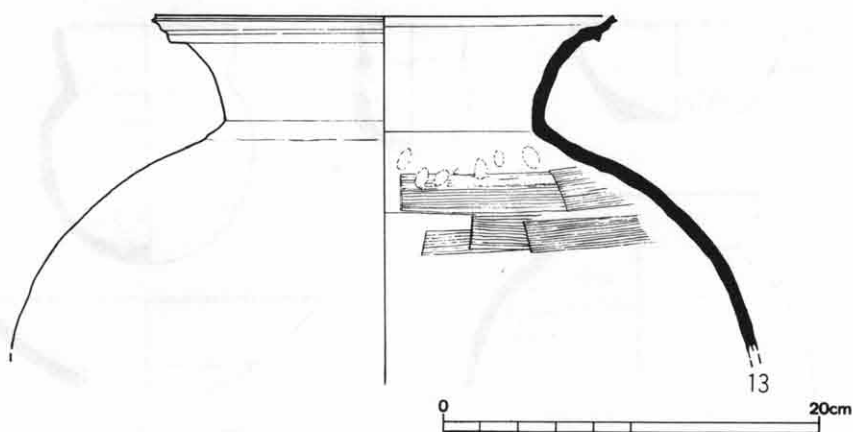


第1図 SH09平面および遺物出土状況図

近接する中海道遺跡第3次調査において平底の韓式土器が出土している。図化したものの底部径が、第3次調査の2点の土器と同じことから韓式土器と想定できるが、胎土はチャート、石英、長石、赤色斑粒をふくみ在地の粘土を用いたものと思われる。8は、残存率が低い土師器の高杯である。9・10は、杯部を合わせた状態で出土した。9は、杯部に段を持つ高杯である。10は、杯部の端部に強いナデが認められる高杯である。11は器形が不明の土師器である。外面はナデ調整、内面はケズリであるが、内外面ともに指頭圧痕が多く認められる。図面の上下は接合面が内傾すると想定し決定した。12は、把手付きの鍋である。体部が丸くなることから鍋と想定した。把手には穿孔や溝は認められないが、破片が大きいことと調査区内においては6世紀代の遺物遺構は全く検出されていないことから他の遺物と共伴関係にあると考えられる。13は、橙茶色を呈する須恵器の甕である。外面



第2図 SH09出土遺物(1)



第3図 SH09出土遺物(2)

は格子目タタキを施した後ナデているが痕跡は残る。内面は当て具痕跡を強い板ナデによって完全に消し去っている。口縁端部はシャープで端面には凹みを持つ。

竪穴式住居跡SH10(第4図)

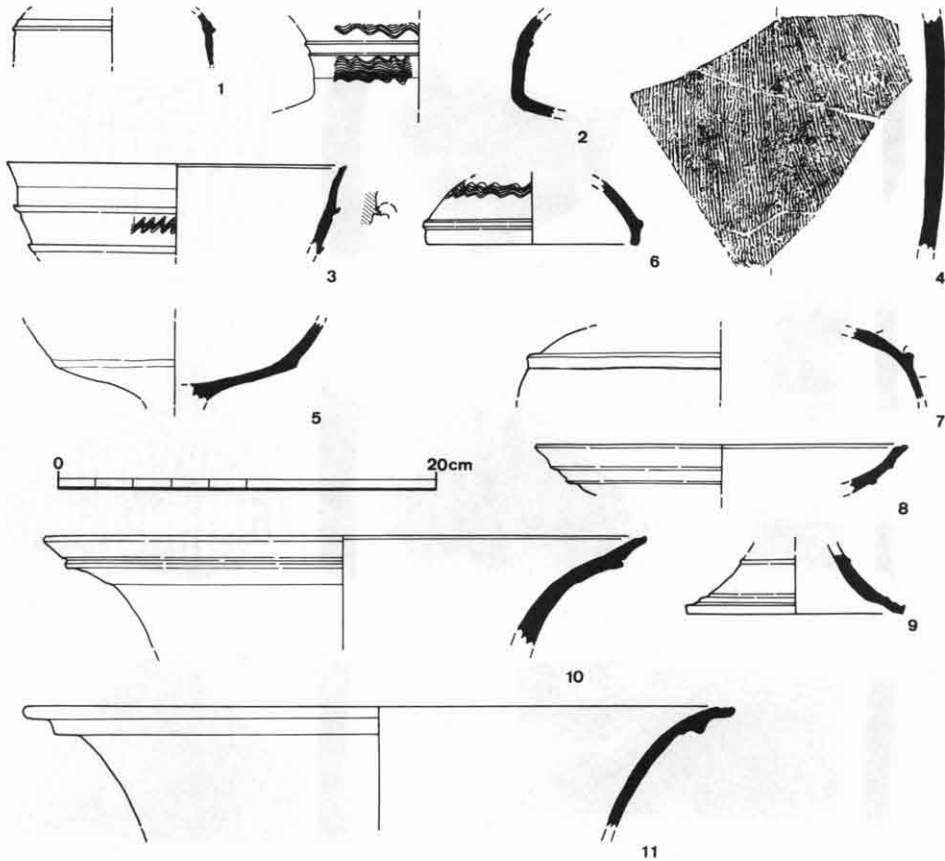
1は、口径の小さい須恵器の杯蓋である。端部はわずかに欠損している。2は、須恵器の壺の頸部である。体部内面は金属器によると考えられるシャープな削りが施される。3は無蓋の高杯である。2条の突帯は鋭く上方に摘み上げられる特徴を持つ。4は、橙茶色を呈する須恵器の甕の体部である。他に底部の破片も認められる。外面には細かい平行タタキが施され、内面は強い指ナデによって当て具痕を完全に消す。

溝SD13(第4図)

5は、杯部に段を持つ高杯である。胎土には赤色斑粒を含む。杯部の残存度は高いが、口縁端部は現存しない。

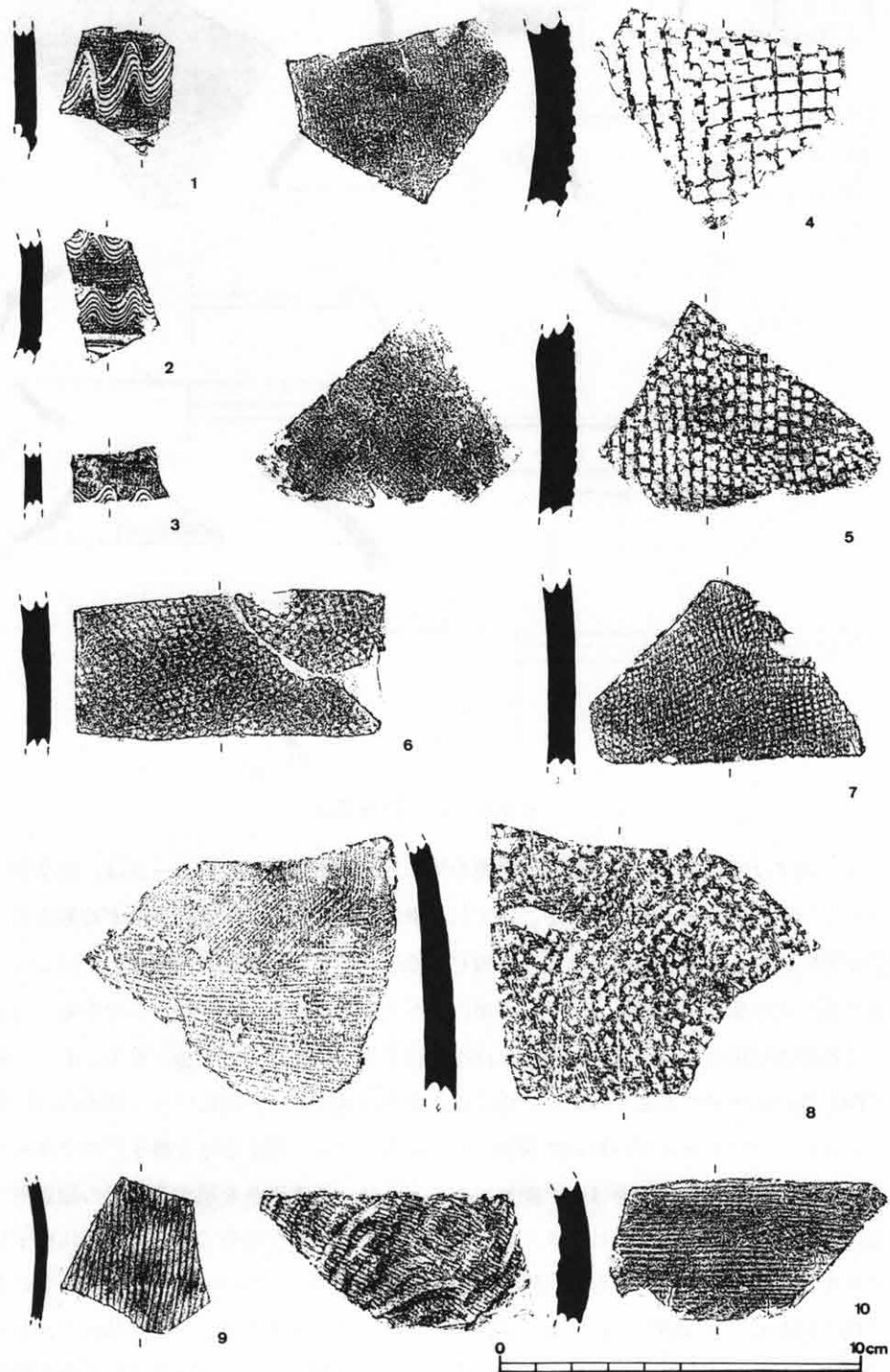
包含層(第4・5図)

6は、断面が赤みを帯びる須恵器で、外面には波状文が施される。図面中では蓋として報告する。類似した形状のものは岡山県法蓮古墳群^(注2)23号墳から出土しているが、器形は高杯である。7は、器形不明の須恵器である。張り付けの突帯がめぐる。上方はナデによって接合の段を消しているが、下部は未調整である。突帯の上方と下方に剝離痕跡が認められ、装飾が加えられていたものと想定できる。8は、端部を持つ須恵器で、天地および器形は不明である。9は、古い須恵器の特徴を持つ高杯の脚である。10は、硬質の須恵器の甕である。口縁端部からやや下がった外面に1条の突帯を持つ。突帯は上方に鋭く摘まれ、SH10の高杯と似る。11は、外面に大型の断面が三角形を呈する突帯を持つ須恵器の甕である。10・11は、高蔵73号窯併行期の甕の特徴を持つ。



第4図 出土遺物実測図

第5図では図化できない須恵器や甕腹を拓影と断面を掲載した。1～3は、波状文の施された須恵器の頸部と考えられる。いずれも黒灰色を呈する。4は、外面が暗茶灰色、内面が暗灰色を呈する。外面には凹凸の激しい格子目タタキが施され内面はナデによって完全に当て具痕跡が消される。出土した甕のうちで最も格子目の大きなものである。5は、やや軟質の淡灰色の須恵器で、外面には格子目タタキ内面はナデが施される。6は、硬質の暗灰色の須恵器である。外面には格子目タタキが施され、内面には当て具の凹凸は認められるがナデによっていねいに調整されている。7は、最も小さな格子目のタタキを持つ須恵器の甕である。内面はナデ調整である。8は、淡青灰色を呈する軟質の須恵器である。外面には不規則に格子目タタキが認められ、内面はハケ調整である。外面に格子目タタキを持つ須恵器片は掲載したい外にも多く含まれており、原体の格子目の大きさによって代表的なもののみ図化した。9は、暗青灰色を呈する厚みの薄い土器の体部で、外面には平行タタキが施され、内面はナデである。10は、外面にカキ目の認められる須恵器の体部である。内面には青海波が残るが平行する凹凸が全体に認められる。当初当て具の木目



第5図 出土須恵器拓影

と想定したが、切り合い関係がなく、連続的に横に続くことから他に原因を求める必要があるが不明である。

以上のことから古墳時代の出土遺物は初期須恵器の時期のものに限定されていることが解かる。須恵器の胎土は陶邑のものや、吹田32号窯のものとは異なっているように思える。^(注3) また、古墳副葬品ではなく集落内から多くの個体の初期須恵器が出土することから、山城地域に未知の須恵器窯の存在が指摘できないであろうか。

(なかがわ・かずや＝当調査研究センター調査第2課調査第4係調査員)

注1 國下多美樹「中海道遺跡第3次(3NNANK-3地区)発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第13集 向日市教育委員会) 1984

注2 島崎 東「備中南部地域における初期須恵器の一樣相」(『考古学と関連科学－鎌木義昌先生古稀記念論集－』鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会) 1988

注3 藤原 学・佐藤竜馬「吹田32号須恵器窯跡の発掘調査」(『昭和60年度埋蔵文化財発掘調査概報』吹田市教育委員会) 1986、藤原 学氏にはお忙しい中、吹田32号窯の遺物の実見の便宜と、中海道遺跡出土の初期須恵器についての多くの有益な教えを賜った。記して礼を述べたい。

平成4年度発掘調査略報

5. 薬師古墳群

調査地 熊野郡久美浜町字女布

調査期間 平成4年5月18日～同8月11日

調査面積 約1,000m²

はじめに 薬師古墳群は、弥生時代の女布遺跡を南東に望む丘陵尾根筋に立地する。横穴式石室を主体部に持つものを含め、合計8基の古墳からなるとされている。今回は、丹後国営のうち開発事業に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて、薬師8号墳の調査と、薬師7号墳及び薬師8号墳より東の丘陵尾根筋部の試掘調査を実施した。

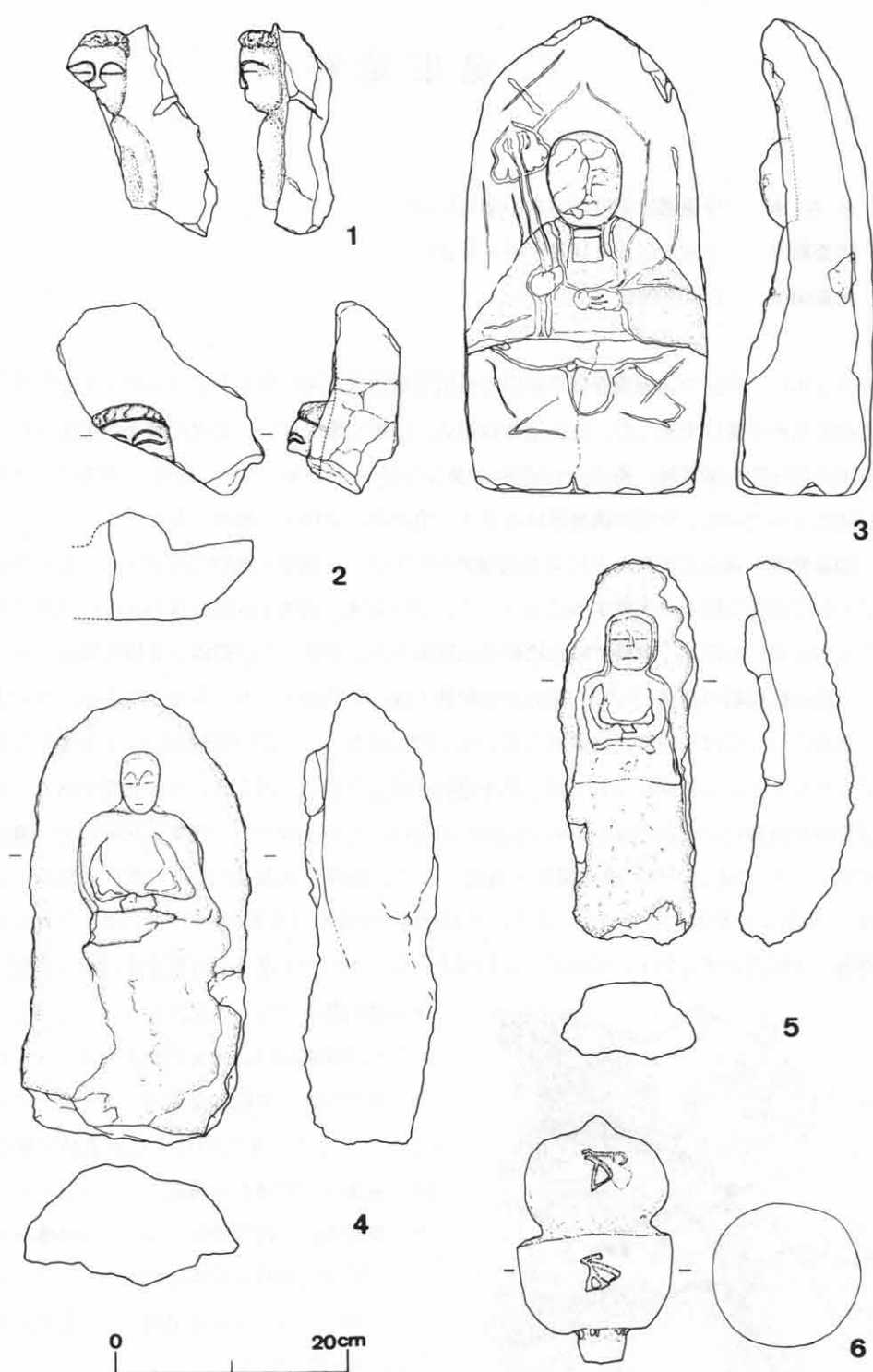
調査概要 試掘調査の結果、薬師7号墳は、木棺直葬の主体部をもつ直径約11mの円墳であることが判明した。6世紀中頃の須恵器(短頸壺)が、主体部直上付近とみられる層序の盛り土中から出土した。丘陵尾根部の東側は、顕著な遺構・遺物の検出はなかった。西側では、中世の火葬墓を合計8基検出した。いずれも直径10～20cmの浅い土坑に少量の火葬骨を埋葬し、上部構造として石仏や五輪塔を立てていたものと思われる。火葬墓は、女布の集落を見下ろす南斜面にのみ営まれていた。五輪石塔は、一石の空風輪がほとんどである。土器は、土師器皿が数点出土している。

薬師8号墳と考えていたところからは、中世の石仏や五輪石塔・宝篋印塔などの部材を、上の平坦部から斜面にかかるところに沿って並べたり、2～3段に積んだりした方形区画



第1図 調査地位置図(1/50,000)

の石列遺構を検出した。東辺の石列は約10mを測り、南・北辺は調査地外へ続く。出土遺物には、土師製筒形容器の破片、須恵器甕片(鎌倉時代)などがある。しかし、五輪石塔・石仏を用いての石列は、近世になって中世の火葬墓を整理した後に築かれたと考えられる。この地は、伝承「無量寺」の寺域内といわれ(小国敏行氏の教示による)、こうした寺の遺構になる可能性も高い。中世火葬墓と近世の基壇状石列の検出が主な成果といえる。(黒坪一樹)



第2図 出土遺物実測図

6. 定山遺跡

所在地 与謝郡岩滝町字弓木小字石田ほか

調査期間 平成4年5月18日～同8月27日

調査面積 約1,000m²

はじめに 今回の発掘調査は京都府営石田団地造成工事に先立ち、京都府土木建築部住宅課の依頼を受け実施した。定山遺跡は過去、ほ場整備に伴い、2次の調査が実施され、古墳時代後期の集落跡、横穴式石室墳(赤鼻1号墳)、平安から中世にかけての遺構・遺物が確認されていた。今回の調査地は赤鼻1号墳の北に隣接する地点である。

調査概要 調査はグリッドによる試掘調査を実施し、遺構・遺物の確認された北半部分について面的な調査を実施することとした。その結果、遺物では弥生後期～江戸初頭にわたる各時期のものを、遺構では古墳時代後期を中心に奈良・江戸初頭の遺構を検出した。

古墳時代後期の遺構として、竪穴式住居跡5棟、鍛冶炉1、ピットなどがある。竪穴式住居跡については、同時期に並存していたものではなく、一定の時間幅の中で変遷しているようである。この点については、出土遺物の検討を通じ、明らかにする必要がある。鍛冶炉は傾斜地に半円状の掘り込み(SX02)を設け、そのほぼ中央に構築されていた。遺構に伴うものではないが、鍛冶関係の遺物として、鉄滓・鉄製品(刀子・棒状鉄製品・鉄鏃)・砥石などが出土している。また、SX02埋土中からはTK209並行期と考えられる須恵器・土師器が多く出土している。このほか、ミニチュア土器・滑石製有孔円板・土製勾玉・滑石製勾玉などの祭具が出土している。

今回の調査地は、過去の調査成果と合わせて、ムラに伴う自給的な鍛冶工房と考えることができよう。すなわち、定山遺跡は居住域・墓域・生産域から構成されるムラであったと推定され、古墳時代のムラの全体像を知る上で貴重な資料を提供したものとといえる。

この他に、注目される遺物として奈良時代後期の布目瓦が出土している。

(石崎善久)



調査地位置図(1/50,000)

7. 天若遺跡第4次

所在地 船井郡日吉町大字天若小字森形ほか
 調査期間 平成4年4月20日～同9月18日
 調査面積 約3,200m²

はじめに 今回の天若遺跡の調査は、日吉ダムの建設に伴い遺跡周辺が水没地となるため、水資源開発公団の依頼を受けて、平成元年度から行ってきた調査の最終の現地調査である。

昨年度までの調査で、6世紀から7世紀前半期にかけての竪穴式住居跡33棟、7世紀後半期の土坑、8世紀前半期の井戸跡及び奈良時代から平安時代にかけてと思われる掘立柱建物跡数棟を検出している。遺物には、縄文時代の土器及び石器・石片や、弥生時代及び古墳時代前半期の石器、古墳時代の土師器・須恵器、中世の瓦器や陶器・磁器などがある。

このことから天若遺跡では、古くから人々の営みがあり、古墳時代後期には集落が形成されていたことを確認している。

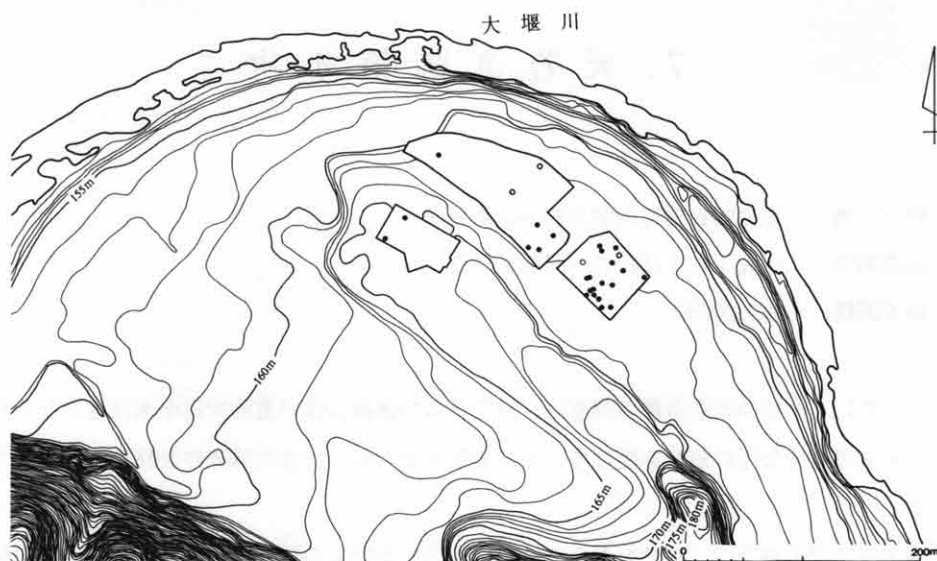
平成4年度の調査 今年度は、元年度試掘調査の13・14トレンチ周辺を約3,200m²にわたって拡張し、竪穴式住居跡5棟、掘立柱建物跡2棟をはじめ土坑・ピットなどを多数検出した。

縄文土坑・陥穴 今回17基の縄文時代後期の陥穴を確認した。円形のものが多く、一部楕円形のも認められる。いずれも径1m程度、深さ1m程度の土坑の底に径10cmほどの逆茂木を立てたものである。以前の調査でも7基検出していたが、今回はじめて縄文土器が伴出したため時代を特定することができた。この台地上にはさらに多くの陥穴が存在しているものと思われる。おそらくイノシシやシカなどを対象とした狩りが行われていたのであろう。

土坑のなかには縄文土器の破片が出土したものがある。こうした土坑のなかには上面に石が置かれたものもあり、



第1図 調査地位置図(1/50,000 京都西北部)



第2図 縄文時代土坑・陥穴分布図

○印；土坑 ●印；陥穴

墓となる可能性の高いものもある。

住居跡・建物跡 竪穴式住居跡は5棟を確認した。いずれも6世紀末のもので、壁際に竈を設けている。掘立柱建物跡は2棟を確認した。2間×3間の総柱の建物跡と不明な部分もあるが3間×5間の建物跡である。時代は不明である。

なお、ごく最近まで家屋が建ち並んでいた地点でも一部調査を行った。調査の結果、包含層から中世の瓦器や陶器が多く出土した。おそらく鎌倉時代以降、この付近に家並みの中心が移り、近世・近代・現代に至るまで連綿と集落が営まれてきたのであろう。

まとめ 縄文時代後期の陥穴を多数検出したことで、この台地が狩猟の場所であったことが判明した。縄文時代の陥穴遺構は、関東及び中部や東北・北海道といった東日本地域や九州・中国といった西日本地域では数多く調査されている。しかし、これまで近畿でのまとまった調査例は稀であった。今回の調査により、陥穴を用いた狩猟方法は地域的な狩猟方法ではなく、縄文時代を通じて日本各地で行われていた狩猟方法であることが確認できたといえよう。

また、台地上では縄文時代の住居跡は検出できておらず、縄文時代の集落は別地点に求めざるをえない。台地前面を流れる大堰川沿いでは、周山盆地もしくは園部盆地まで出なければ定住できるようなまとまった平地はなく、いずれも5km以上の距離がある。縄文時代のテリトリーを考えるうえでは、こうした地域での調査成果が期待される。

(三好博喜)

8. 祇園谷遺跡

所在地 北桑田郡京北町大字下小字谷川尻

調査期間 平成4年7月6日～同8月11日

調査面積 約350m²

はじめに 祇園谷遺跡の発掘調査は、京都府南丹土地改良事務所が施工する府営ほ場整備事業に伴う事前調査で、京都府農林水産部の依頼を受けて実施した。

祇園谷遺跡は、弓削川と大堰川が合流する地点に隣接しており、また、その合流部の北方丘陵先端には、奈良時代に建立された周山廃寺が位置する。それらの立地条件から、周山廃寺と何らかの関連を示唆する遺構・遺物の存在が予想された。

調査概要 調査地は、大堰川の東岸に位置しており、東から西へ緩やかに傾斜する地形上にある。トレンチ内では、約200の柱穴と溝を1条検出した。柱穴掘形の基本的形状は、直径20～40cmの円形であるが、一辺60cmの方形掘形をもつ柱穴も確認し、自然地形の傾斜に直交する主軸線をもつ掘立柱建物跡を2棟確認した。溝は、幅40cm・深さ30cmを測り、主軸線は磁北とほぼ一致している。この溝が建物群の区画を目的としているならば、先述した掘立柱建物跡群とは異なった建物跡を想定することができる。

出土遺物には、須恵器・土師器・瓦・瓦器・中世須恵器などがあるが、その多くが遺構検出面直上に堆積する遺物包含層からの出土である。

まとめ 今回の調査では、奈良時代の柱穴を総計200以上検出し得た。掘立柱建物跡として復原できたものは2棟にすぎないが、本調査地点を中心として集落が広がるものと予想できる。また、限定された資料で考えるならば、比較的規模の大きな掘立柱建物跡が存在することや、瓦片が出土することなどから、周山廃寺との関連で成立した集落である可能性が指摘できる。

(小池 寛)



調査地位置図(1/50,000) [●印]

9. 日置遺跡

所在地 船井郡八木町日置

調査期間 平成4年8月10日～同9月2日

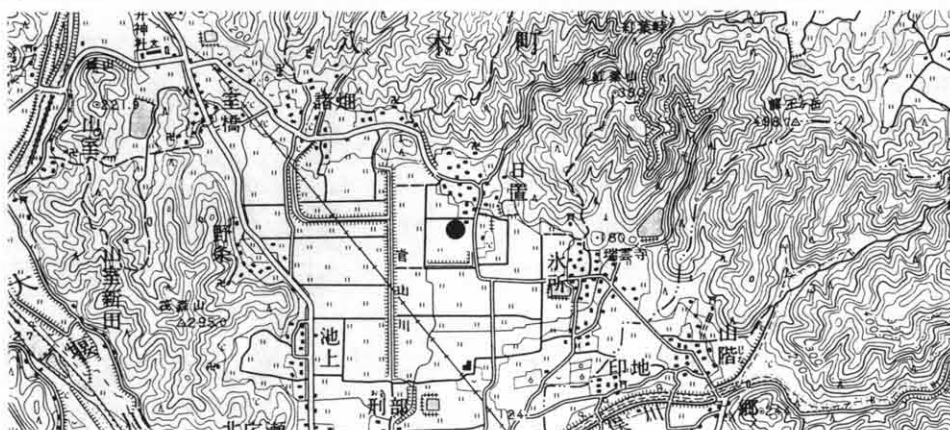
調査面積 約350m²

はじめに 日置遺跡の発掘調査は、京都府南丹土地改良事務所が施工する府営ほ場整備事業に伴う事前調査で、京都府農林水産部の依頼を受けて実施した。

調査概要 日置遺跡は、北方から南方にかけて緩やかに傾斜する地形上に立地している。調査地内からは、奈良～平安時代の須恵器・土師器などを含む遺物包含層を検出した。包含層中の遺物は、破片資料が多く、ローリングを受けた土器片が多く見られる。

検出した遺構は、ピット・土坑などである。ピットは、直径30cm・深さ20cmを測る円形で、埋土に砂利が多く見られた。関連する遺構がないため、性格については不明であるが、奈良～平安時代の遺物包含層直下で確認していることから、遺構の帰属時期を奈良～平安時代に比定し得る。土坑は、直径40cmの円形を呈し、近世陶磁器類が出土している。

まとめ 今回の調査では、ピット・近世土坑を検出したが、他の関連遺構が存在せず、性格などは不明である。一方、遺物包含層から出土する土器の多くは、ローリングを受けており、地形的に北方からの流れ込みによる2次堆積層として認識し得る。調査成果から集落の中心は、当該地より北方の丘陵端に位置するものと考えられる。(小池 寛)



調査地位置図(1/50,000) [●印]

10. 上中遺跡第6次

所在地 北桑田郡京北町大字上弓削小字沢の奥15番地

調査期間 平成4年5月25日～同7月24日

調査面積 450m²

はじめに 今回の発掘調査は、府立北桑田高等学校構内の林業科校舎の増改築に伴い、京都府教育委員会管理部の依頼を受けて実施した。

上中遺跡は、京北町下弓削から下中に広がる遺跡であり、弓削川右岸の河岸段丘上に位置している。北桑田高等学校内の校舎等の改築に伴い、過去5回の発掘調査がなされている。それによると、古墳時代前期の竪穴式住居跡や土坑などが出土している。古墳時代前期の甕形土器には「く」の字状に伸びる口縁で、長胴のものと受け口状口縁を有するいわゆる近江型甕、螺旋叩きを有する庄内式系甕の三者が出土している。

調査概要 今回の調査地は昭和61年度調査地の東側に位置している。増改築される校舎にあわせて南北に長い調査地となったが、試掘のため、3つの正方形に近いトレンチを設定して、掘削を行った。もっとも北側のトレンチでは学校内の廃棄物処理のための攪乱が激しく、また中央のトレンチでも過去の養鶏施設などの攪乱により、遺物の検出はできなかった。最も南側のトレンチでも建物基礎の河原石が埋め込まれていた旧耕作土の下には灰色粘土層、段丘礫層が堆積しており、遺構面を確認することはできなかった。旧耕作土からは開墾によって細片化した古墳時代及び飛鳥時代の須恵器や土師皿・瓦器などが検出された。またチャート製の剥片も検出された。

(野島 永)



調査地位置図(1/25,000)

11. 燈籠寺遺跡第6次

所在地 相楽郡木津町大字木津小字内田山

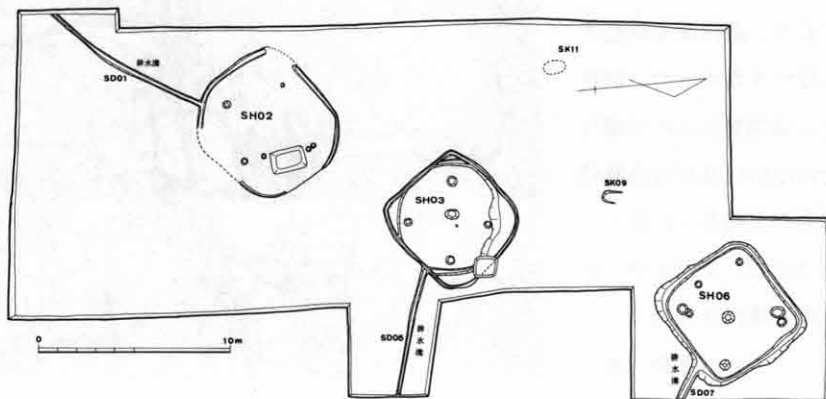
調査期間 平成4年6月3日～同9月4日

調査面積 約1,270m²

はじめに 京都府立木津高校に所在する燈籠寺遺跡の調査も今年度で6回目を数える。これまでの調査は、高校敷地内の南半部の正門付近を中心に5次にわたる調査を行い、弥生時代中期(第2様式)の方形周溝墓のほか、家形埴輪などが出土した方墳の周溝などがみつつかっている。今回の調査は、高校敷地内の北半部で1958年の農場造成工事に際してみつかった内田山A1号墳に近接した地点で、校舎の改築工事に伴う事前調査として実施した。

調査概要 調査は2か所のトレンチを設定して実施した。東西方向のBトレンチでは、円形にめぐる古墳の周溝を2基確認した。そのうち、SD01(内田山A4号墳)の南端では周溝をさらに掘り凹めた円形土坑があり、その中からTK47前後の須恵器が一括出土した。南北方向に設定したBトレンチではTK23前後の須恵器杯身・杯蓋を伴う土坑2基(SK09・11)のほか、3基の竪穴式住居跡を確認した。各竪穴式住居跡は一辺6～7mを測る平面隅丸方形の住居跡で、SH03は建て替えが認められる。各住居跡には排水溝が掘られ、SH03・06は南東方向に、SH02は南西方向に排水溝がのびている。SH03・SH06の床面には弥生時代後期後半の壺・甕・高杯・器台などが比較的まとまった状態で出土した。

今回の調査では、燈籠寺遺跡が墓域としてこの台地上が利用されているほか、短期間ながら集落としても利用されていたことが明らかとなった。(石井清司)



A トレンチ遺構配置図

第10回 小さな展覧会「京都発掘'92」を終えて

村 田 照 久

平成4年8月15日(土)から8月29日(土)までの延べ13日間、向日市文化資料館において京都府教育委員会後援、向日市文化資料館協賛のもとに第10回小さな展覧会「京都発掘'92」を開催した。この展覧会は、昨年度の府内の発掘調査の成果を広く一般に公開し、埋蔵文化財への理解と文化財の保護及び普及啓発を目的として実施した。例年よりも開催期間が一日短く、また、台風の影響などで悪天候の日が幾日かあったにもかかわらず、回を重ねる毎に見学者数は増加する傾向にあるようである(グラフ1)。特に以前より待ち望みやって来られた方や、新聞掲載された記事を見て来られた方が多かったのは印象的であった。しかし、見学者の内訳(グラフ2)をみると、中高生、特に高校生の入場者の少ないのが目につく。昨年度も同数程度であり、今後の普及啓発活動において一つの課題を提起されているように思う。

さて今回の展覧会開催にあたっては、次のような広報活動を行った。1. 開催要項の配

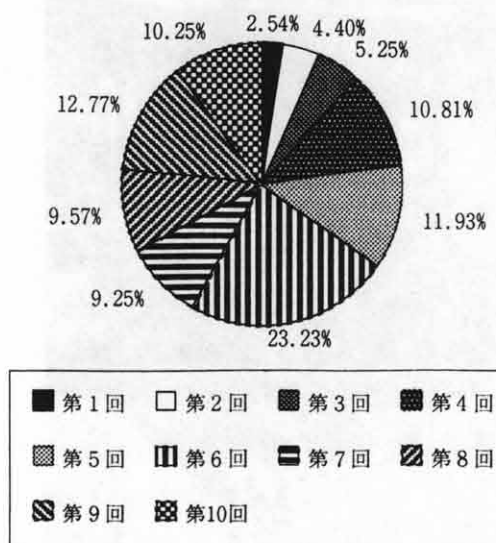


第10回 小さな展覧会「京都発掘'92」

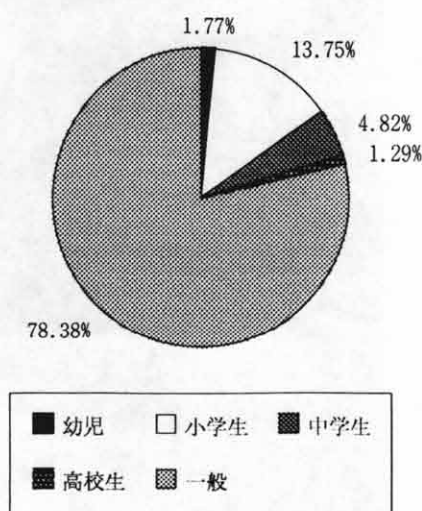
布(関係機関) 2. 葉書による案内(個人) 3. ポスターの掲示(関係機関、阪急電鉄駅構内) 4. 各新聞社への公開と掲載、などである。

展示面では、26遺跡(センター関係16遺跡、府・市町村及び京都文化博物館10遺跡)、遺物総数347点、パネル展示6遺跡を選び展示した(表1)。展示遺物については、旧石器時代から江戸時代まで時期も広範囲にわたり、丹後・丹波・山城各地域の遺跡・遺物を偏りのないように選定し、前年度の調査ではないが府立山城郷土資料館での復原が終わった瓦谷古墳出土の甲冑もあわせて展示した。また、長岡京東院跡の復原模型や柱根、瀬後谷窯跡から出土した瓦塔や瓦谷古墳出土の蓋形埴輪を露出展示とした。珍品コーナーでは、府内で特に注目を集める遺物にスポットライトを当て、ふれあいコーナーでは、見学者に文化財を身近なものとして体験してもらう機会として位置づけた。おそろおそろ遺物に触ったり、手に持ってみたり、親が子に触ってみせたり、触るのを促したり・・・ほのぼのとしたコーナーであった。展示物の説明としては、できるだけ語句にルビ付けをし、平易な文になるように配慮し、より具体的に「どこで」「どんな」「どのように」「何に」・・・がわかるように、それぞれの遺跡について写真パネルを用意し、遺物の形や使われ方などをわかり易くする工夫も行った。しかし、後者は全ての遺跡に及ばず、まだまだ工夫や努力が足りなかった面も残された。また見学者により一層の理解・関心を深めてもらうため、中学生以上の入場者には展示図録(B5版、32頁、展示遺跡についての説明と写真を収録)を、小学生・幼児には子ども用パンフレット(B5版、

グラフ1 第10回までの入場者数比率



グラフ2 第10回入場者数内訳比率



※第6回は巡回展「鏡と古墳」とあわせて開催。

表1 展示遺跡名一覧

離湖古墳	小谷17号墳	百々遺跡
こくばら野遺跡	池尻遺跡	旦棕遺跡
堤谷窯跡群	平安京跡	二子塚古墳
堤谷古墳群	聚楽第跡	横道遺跡
遠所遺跡群	長岡京跡左京第265・277次	瀬後谷窯跡群
通り古墳群	長岡宮跡第259次	西山古墓
蔵ヶ崎遺跡	長岡京跡右京第365次	樋ノ口遺跡
高田山古墳群・経塚	勝龍寺城跡	瓦谷古墳
青野西遺跡	下植野南遺跡	

9頁、遺跡マップ、土器・古墳・埴輪・瓦などの説明、クイズなど)を作成し配布した。展示図録では親しみやすいように写真を多くし、簡潔な文でルビ付けにも配慮したので、見学者からも好評であった。また子ども用パンフレットでは何とか楽しく見学できないかと考え、イラストを増やしクイズコーナーを設けた。特に子ども達はクイズに夢中で、展示ケースの上が消しゴムのカスでいっぱいになるなどのハプニングも続出。おまけに丸つけをせがんだり、賞品をねだったりする子も多く、結局以前センターで作成した絵葉書やしおりまで登場する事態となった。

私個人としては、このような展覧会で開催者側に立ち活動するのは初めての経験であったが、展覧会に向けての準備の仕方や展示の工夫などで、いろいろ諸先輩方に教えてもらいながらやり終えることができ、得るものも大きく有意義な展覧会であった。ただ、もっと見学者の人達と展示物を交えながら交流を深めるべきだったと今更ながら悔いが残る。

ところで、文化財は身近にありながら、まだまだ遠い存在でもあるように思う。また、その保護は一部の人間だけでは到底困難なことであり、一般府民の興味関心度が高まるなかで達成されていくと思う。従って、「小さな展覧会」の持つ意義も大きい。近年の動向として、学校教育においては、生涯学習の基盤を培うという観点に立ち、学習指導要領の大幅な改訂(小学校は平成4年度より、中学校は平成5年度より完全実施)がおこなわれ、月1回第2土曜日の週休2日制の導入も開始された。特に社会科では、学習方法として体験・活動・見学・調査・表現などが重要視され、歴史学習においても博物館・郷土資料館などの公共施設や遺跡・文化財などの見学や調査を通して「・・・先人の業績や優れた文化遺産について関心と理解を深めるようにし、我が国の歴史や伝統を大切にする心情を育てる」ことを目的(小学校6学年)として掲げられている。また、社会教育においても、国際化・高度情報化・高齢化する社会の中で、生涯学習、つまり生涯にわたる主体的な学習活動の場の一つとして博物館や資料館が位置づけられ、学習対象としての遺跡・文化財に

対する関心も年々高まっている。このように生涯学習の一つの領域という面からも、展覧会などの普及啓発事業に対する期待度もますます大きくなってきている。以上の点からも「小さな展覧会」は今後もより一層、充実・発展させていかなければならない事業だと思う。限られた人的・物的・財的・時間的な諸条件の中で、より「文化財って楽しい・おもしろい」というような、府民に親しんでもらえ、ともに学び合える展覧会を模索していかなければならない。例えば

- ・ふれあいコーナーのような体験的な場を増やす。
- ・復原図や模型などを多く利用し、当時の様子がイメージできるように工夫する。
- ・年表などで、中央と地方の様子を対比しながら説明する。
- ・発掘調査のコーナーを設け、調査で使う器材の陳列や、調査の様子のパネル展示、VTRによる調査風景の映写。

など考え出したら切りがないが、限られた諸条件の中で、できる限り見学者の立場に立ったより具体的にわかりやすい展示方法の追求が必要だと思う。

最後になりましたが、展覧会開催にあたりご協力・ご援助いただいた関係機関の方々に心よりお礼申し上げます。

(むらた・てるひさ＝当センター調査第1課企画係調査員)



展覧会風景

府内遺跡紹介

57. 宇治宿禰墓

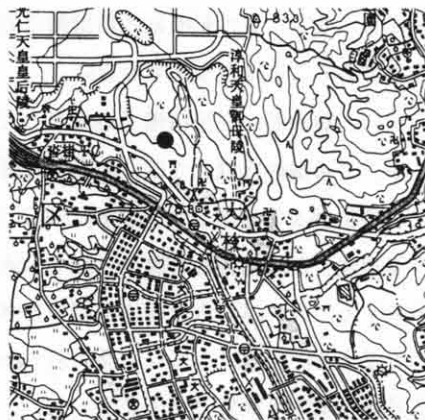
宇治宿禰墓は、1917年1月に京都市右京区大枝塚原町の丘陵部中腹で発見された墳墓で、中から墓誌が出土したことで宇治宿禰の墳墓であることが判明した。古代の墳墓では被葬者名のわかる数少ない例として貴重な例となっている。

墳墓のあるところは、旧京都府乙訓郡大枝にあたり、乙訓郡でも山城国から丹波国へ向かう山陰道のすぐ北の丘陵に存在する。このあたりには桓武天皇皇后高野新笠の墳墓をはじめ、淳和天皇御母陵などの陵墓もあり、8世紀から9世紀にかけて葬地として利用されてきたところでもある。

1917年の発見当時の梅原末治の報告によれば、地表の下約1.5mの粘土層の中から、長さ45.5cm・幅42.9cm・高さ40.9cmの石櫃が発見されたという。すでに蓋は身からずれて砂が入り込んでいたが、石櫃の中には銅製の印籠式の蓋を持つ蔵骨器が納められていた。石櫃の周囲には15個の自然石が積み重ねてあり、石櫃を固定する目的であった。おそらく、土壙を最初に掘り、自然石を積み上げて石櫃を安置し、その中に蔵骨器を納めて蓋をしたようである。

また、粘土の中からは木炭も出土しているため、この近くで火葬が行われてこの地に葬られたと思われる。封土は、この時代の墳墓に特徴的なもので、ほとんどないかもしくはわずかなものと考えられている。

このような墳墓の構造は、この時代の墳墓とほぼ共通しており、8世紀の墳墓の中にあつてはそれほど珍しいものではない。しかし、そこから出土した墓誌は、貴重なもので、被葬者の手がかりとなる。墓誌が出土したのは、石櫃の下の小石の南西部分で粘土の中から出土したとある。したがって、墓誌は石櫃の外側に立てかけてあったようで、太安万呂墓や小治田安麻呂墓で墓誌が小石室の中から出土したことからすれば、これらの出土の仕方と



遺跡所在地 (1/50,000)

は若干異なるようである。

墓誌は、破損が著しく、全文を知ることはできない。前後左右は腐蝕して全く形状も不明である。ただ、東野治之氏の推定によれば、出土時に墓誌と気づかれずに上下が折りとられという伝えを信用すると、現在の墓誌の左右は作られた当時とそれほど大きさに差がないことになるかとされている。

墓誌は、「・・・前誓願物部神(1行目)・・・八繼孫宇治宿禰(2行目)・・・大平子孫安坐(3行目)・・・雲二年十二月(4行目)」とある部分が判読できる程度である。宇治宿禰は、『新撰姓氏録』山城国神別条では、「饒速日命六世孫伊香我色雄命之後也」とあり、1行目の「物部神」は、物部氏の祖先神饒速日命と考えられている。ただ、ここでは、具体的な神名が欠損しているため、確実に饒速日と書かれていたかどうかは明らかではない。しかし、少なくとも物部氏と同族であるという伝承を宇治宿禰の氏族伝承として持っていたことだけは確実である。

2行目の「八繼」は、八世孫の意味か、八繼の孫の宇治宿禰というように、人名と捉えるか意見の分かれるところである。また、3行目の「大平子孫安坐」は、他の墓誌には見えない文言で、はじめの「誓願」とあわせて、仏像の造像銘文にみえることから、仏教的色彩が強いといわねばならない。

4行目の「□雲二年」は、慶雲2(705)年か神護景雲2(768)年のいずれかと考えられている。梅原末治は、版の上に三文字を入れる余地がないことから、慶雲説を主張されている。ところが、東野氏によれば、神護景雲は景雲と省略されることがあるだけでなく、古い墓誌ほど表裏に記し、野線も引かれていない事実から、神護景雲説の方に傾くとされている。しかし、共伴遺物も知られていない現状では何とも言えない。

このように、銘文をどうみるかで墳墓の築造年代が約60年ほど変わってくる。しかし、いずれにせよ、8世紀墳墓の典型例であり、被葬者のわかる墳墓としてはきわめて貴重なものであることは言うまでもない。

次に、被葬者の宇治宿禰であるが、この氏名は山城国宇治郡宇治郷に由来すると思われるが、『新撰姓氏録』では、河内国神別や和泉国神別にも宇治部連や宇遲部連が見えるので、宇治部を管掌する伴造氏族であるとも言われている。宇治宿禰は、天武13年12月に「菟道連」から宿禰性が賜与されて宇治宿禰になった氏族で、8世紀の正倉院文書などに散見する。多くは、山背国宇治郡の各郷出身の人であるが、中には「宇治連」のままのものも見える。官職としては、擬大領・保長・主帳・郷刀禰というのが多い。典型的な在地首長層に属する氏族と言えよう。

宇治宿禰は、8・9世紀の史料では山背国宇治郡内以外では、越前国足羽郡草原郷に

「宇治連」(『東南院文書』2-398)が見える程度で、乙訓郡と関係あるものは見あたらない。宇治宿禰墓が旧乙訓郡内で見つかったのはどのような理由によるのかは定かではないが、乙訓郡の大枝周辺が葬地としてよく利用されていたことに最大の原因があろう。ただし、この宇治宿禰が乙訓郡に居住したか、宇治郡に本貫があったかははっきりしない。一説には、大枝氏との関連でこの地に葬られたとする考え方もあるが、8世紀の墳墓の例では、太安万呂墓に見られるように、いわゆる中央官人の共同墓地的な葬地が存在し、そこに葬られたともみる余地があるので、今後は多角的な観点から考察する必要があるだろう。

(土橋 誠)

<参考文献>

- 梅原末治「山城に於ける宇治宿禰の墳墓と其の墓誌」『芸文』8-4 1917年
 梅原末治「宇治宿禰墳墓」『京都府史蹟勝地調査會報告』第1冊 京都府 1919年
 島田貞彦「最近発見せられたる平安朝時代の墳墓」『歴史と地理』4-1 1919年
 岩城千代「墓誌を伴う奈良時代の墳墓について」『先史学研究』5 1965年
 東野治之他『日本古代の墓誌』奈良国立文化財研究所 1977年
 佐伯有清『新撰姓氏録の研究』考証篇第三 吉川弘文館 1982年

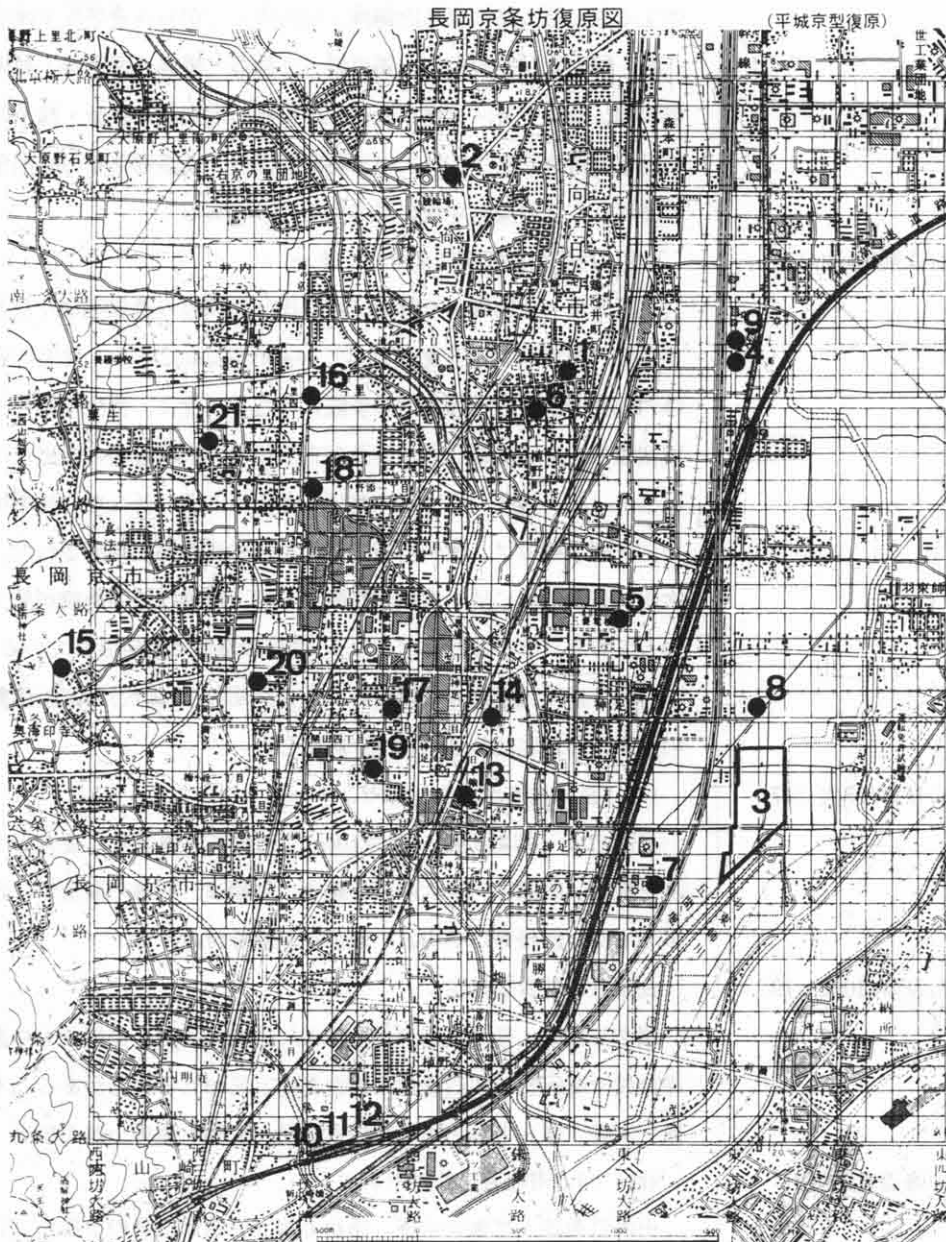
長岡京跡調査だより・43

平成4年8月26日・9月24日・10月28日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮内2件、左京域7件、右京域12件、京外その他3件の計24件であった(一覧表・位置図参照)。このうち、主なものについて調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1992年10月末現在)

番号	次 数	地区名	調 査 地	調査機関	調査期間
1	宮内271次	7AN10Q	向日市上植野町稲葉	(財)向日市埋文	8/24~9/3
2	宮内272次	7AN17E	向日市寺戸町西野辺1	(財)向日市埋文	10/26~
3	左京288次	7ANMND-2	京都市伏見区淀樋爪町	(財)京都市埋文	4/1~
4	左京291次	7ANEKD-5	向日市鶏冠井町小深田	(財)向日市埋文	7/27~9/11
5	左京292次	7ANLZS-3	長岡京市馬場図所	(財)長岡京市埋文	8/25~9/10
6	左京293次	7ANFMM-3	向日市上植野町円山7	(財)向日市埋文	9/7~9/25
7	左京294次	7ANMAR-3	長岡京市神足芦原16-1	(財)長岡京市埋文	9/21~9/22
8	左京295次	7ANMTG-5	長岡京市神足棚次6-1	(財)長岡京市埋文	10/12~
9	左京296次	7ANEKD-6	向日市鶏冠井町小深田	(財)向日市埋文	10/5~
10	右京368次	7ANSID-2	大山崎町円明寺壺町田	(財)京都府埋文	4/8~
11	右京394次	7ANSDD-6	大山崎町円明寺・百々	(財)京都府埋文	4/8~
12	右京395次	7ANSID-4	大山崎町円明寺壺町田	(財)京都府埋文	4/8~
13	右京400次	7ANMNM-3	長岡京市東神足二丁目	(財)長岡京市埋文	6/8~7/17
14	右京401次	7ANMSL-4	長岡京市東神足一丁目	(財)長岡京市埋文	5/15~9/30
15	右京406次	7ANPTD	長岡京市奥海印寺谷田	(財)長岡京市埋文	7/7~7/23
16	右京407次	7AN1AC-3	長岡京市今里畔町23	(財)長岡京市埋文	7/10~8/12
17	右京408次	7ANKST-4	長岡京市開田二丁目	(財)長岡京市埋文	7/20~10/1
18	右京409次	7ANIFD-8	長岡京市野添二丁目	(財)長岡京市埋文	7/27~8/7
19	右京410次	7ANKHT-4	長岡京市開田四丁目	長岡京市教委	8/17~9/30
20	右京411次	7ANKNZ-2	長岡京市天神一丁目	(財)京都府埋文	8/24~
21	右京412次	7ANIKI-1	長岡京市今里五丁目	(財)長岡京市埋文	9/17~10/16
22	中海道遺跡第21次		向日市物集女町中条6	(財)向日市埋文	6/15~7/31
23	中海道遺跡第22次		向日市物集女町中条9	(財)向日市埋文	8/18~
24	中海道遺跡第23次		向日市物集女町中条47	(財)向日市埋文	9/22~10/17



▽番号は一覧表・本文 () 内と対応
調査地位位置図

左京第291次(4)

(財) 向日市埋蔵文化財センター

弥生時代から近・現代に至る各時期の遺構・遺物を検出。長岡京期では、二条条間大路(新説の二条大路)の南側溝と、それに交差する東二坊大路の東西両側溝・町内溝・しがらみ遺構等を確認した。構内及び周辺から、須恵器・土師器・墨書人面土器・瓦磚類の他、曲物・箸・木簡・人形・馬形等の木製品や獣骨・種子等の動植物遺体が出土した。中世時期の溝は、乙訓郡九条^{ゆずりは}弓弦羽里の26坪と27坪の条里坪境に該当するものである。

右京第401次(14)

(財) 長岡京市埋蔵文化財センター

右京五条一坊四町・五町域、永井氏(江戸期)の勝龍寺城及び神足遺跡に当たり、調査面積は、1,444㎡と広域である。検出内容は、縄文晩期から近世までの多岐にわたる。特に、弥生中期と古墳初頭の方形周溝墓合計13基及び古墳後期の土壙墓群の検出が注目され、神足遺跡の同時期の墓域を考えるうえに新たな知見を得た。長岡京期では、西一坊坊間第一小路の東西幅が確認された。次の、平安時代には、大型建物跡群や柵・溝等の区画施設が見つかり、単なる村落ではなく、豪族の邸宅と想定されている。この他、細川氏勝龍寺城以後の、永井氏期(17世紀代)の家臣屋敷の建物跡群と宅地割りの状況が判明した。

右京第408次(17)

(財) 長岡京市埋蔵文化財センター

長軸1.7m・短軸0.9m・深さ10cmで東西に主軸を置く長方形土坑を検出。内部に、拳大の石を敷き、外観は、石敷の製塩炉に類似するが、性格等は不明。小規模な覆屋を付設する。

右京第410次(19)

長岡京市教育委員会

縄文・古墳・長岡京期の溝を検出。後者では杭と側板をもつ護岸施設や凝灰岩の切石を伴う橋台基礎と思われる集石がある。木簡・木沓・箸・人形・斎串等の木製品や丸軋・墨書土器が出土。

中海道遺跡第21
～23次

(財) 向日市埋蔵文化財センター

中海道遺跡と物集女城跡に係わる調査。中世以降の土器類・石造物等を中心に多数の遺物が出土した。特に、長岡宮式鬼面文鬼瓦の出土は、周辺に同時期の寺院跡の存在を推測させる。

(辻本和美)

セ ン タ ー の 動 向

1. できごと

8. 1 西山塚古墳(木津町)現地説明会
 5 祇園谷遺跡(京北町)関係者説明会
 6 鹿谷遺跡(亀岡市)現地説明会
 全国埋蔵文化財法人連絡協議会
 近畿ブロック主催者会議(於:大
 阪市)出席(佐伯次長、安藤課長、
 土橋主任調査員)
 7 定山遺跡(岩滝町)現地説明会
 10 日置遺跡(八木町)発掘調査開始
 11 薬師古墳群(久美浜町)発掘調査
 終了(5.18～)
 祇園谷遺跡発掘調査終了(7.6～)
 15 第10回小さな展覧会「京都発
 掘'92」開会(～29)
 18 理事協議会開催-於:当センター、
 福山敏男理事長、樋口隆康副理事
 長、城戸秀夫常務理事、中沢圭二、
 川上 貢、上田正昭、足利健亮、
 藤田价浩、堤圭三郎の各理事出席
 20 丹後町夏期大学講座(丹後町)講
 演(平良課長補佐)
 23 シンポジウム「古代製鉄と日本
 海文化」(弥栄町)講演(増田主任
 調査員)
 25～9.8 奈良国立文化財研究所研修
 (石器調査課程)出席(岸岡調査員)
 里ヶ谷横穴群(大宮町)発掘調査開

始

- 26 長岡京連絡協議会
 27 定山遺跡発掘調査終了(5.18～)
 28 第67回研修会(別掲)
 9. 2 日置遺跡発掘調査終了(8.10～)
 2～ 3 城戸事務局長、奈具岡遺跡
 (弥栄町)現地視察
 3 燈籠寺遺跡(木津町)関係者説明会
 4 燈籠寺遺跡発掘調査終了(6.1～)
 天若遺跡(日吉町)現地説明会
 5 丹後郷土資料館施設開放講座(宮
 津市)講演(伊野係長)
 5～6 埋蔵文化財研究集会(於:和歌
 山市)出席(奥村係長、戸原主任調査
 員、柴調査員)
 10 京都 s k y 大学(日吉町)講演
 (安藤課長)
 11 堤 圭三郎理事、奈具岡遺跡現地
 視察
 17～18 全国埋蔵文化財法人連絡協議
 会研修会(於:群馬県)出席(佐伯次
 長、安藤課長、平良課長補佐、今村
 主事)
 18 西山塚古墳発掘調査終了(4.6～)
 天若遺跡発掘調査終了(4.20～)
 18～19 京都府教育法人研修会(於:
 るり溪少年自然の家)
 19 山城郷土資料館第10回文化財講座
 (山城町)講演(伊野係長)

- 22 下岡古墳(綾部市)発掘調査開始
植物園北遺跡(京都市)発掘調査開始
- 24 長岡京連絡協議会
鳥取古墳群(弥栄町)、左坂古墳群
(大宮町)、平安京跡(京都市)、
長岡京跡右京第411次(長岡京市)
発掘調査開始
- 10. 1 監事監査
- 3 第68回研修会(別掲)
向日市制20周年記念式典(向日
市民会館)出席(佐伯次長)
- 10 樋口隆康副理事長、中沢圭二
理事、奈具岡遺跡(弥栄町)現地
視察
- 13 奈具岡遺跡現地説明会
荒坂遺跡(八幡市)発掘調査開始
- 19 神宮谷古墳(綾部市)発掘調査開
始
- 20 藤井 学理事、八木城跡(八木
町)発掘調査現地視察
桜井市教育委員会清水真一主任
技師、奈具遺跡現地指導
- 22 奈具岡遺跡・奈具谷遺跡発掘調
査終了(5.26~)
- 23 全国埋蔵文化財法人連絡協議会
近畿ブロック事務担当者会議(枚
方市)出席(安田課長補佐、上田・
杉江・松尾主事)

- 24 京都府立山城郷土資料館開館10
周年記念式典(山城町)出席(城戸
局長、佐伯次長)
- 28 長岡京連絡協議会
- 29 八木城跡現地説明会
堤 圭三郎理事、瓦谷遺跡視察
文化財保護研究者訪中団出発
(於：大阪空港)参加(安田課長補
佐、水谷係長、石井主任、小池調
査員)(~11.5)

2. 普及啓発事業

- 8.15~29 第10回小さな展覧会「京都発
掘'92」(於：向日市文化資料館)
- 28 第67回研修会(於：向日市民会館)
—平成3年度の調査から—
森島康雄「聚楽第跡の調査につい
て」、三浦 到「網野町離湖古墳の
調査について」、一展示解説：辻本
和美「第10回小さな展覧会見学」
(於：向日市文化資料館)
- 10.3 第68回研修会(於：城陽市立東部
コミュニティセンター)—南山城地
域の発掘成果から—伊賀高弘「木津
町西山塚古墳の発掘調査について」、
荒川 史「宇治市旦椋遺跡の発掘調
査について」、近藤義行「城陽市横
道遺跡の発掘調査について」
(安藤信策)

府内報告書等刊行状況一覧(91.11～92.10)

発掘調査報告書関係

- 『重要文化財正法寺本堂修理工事報告書』 京都府教育委員会 1992
- 『重要文化財知恩院三門修理工事報告書』 同上 1992.3
- 『埋蔵文化財発掘調査概報』 1992 同上 1992.3
- 『加悦町文化財調査報告』 第16集 加悦町教育委員会 1992.3
- 『園部町文化財調査報告』 第8集 園部町教育委員会 1991.12
- 『平安京跡発掘調査概報 平成3年度』 京都市文化観光局 1992.3
- 『焼場谷炭窯跡発掘調査概報 平成3年度』 同上 1992.3
- 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成3年度』 同上 1992.3
- 『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』 同上 1992.3
- 『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1991.12
- 『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第33集 (財)向日市埋蔵文化財センター 1992.3
- 『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第34集 同上 1992
- 『長岡京市文化財調査報告書』 第29冊 長岡京市教育委員会 1992.3
- 『長岡京市文化財調査報告書』 第30冊 同上 1992.3
- 『宇治市文化財調査報告』 第3冊 宇治市教育委員会 1992.3
- 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第18集 同上 1992.3
- 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第19集 同上 1992.3
- 『平等院 阿弥陀堂中島発掘調査報告』 宗教法人平等院 1991.11
- 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第22集 城陽市教育委員会 1992.3
- 『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』 第10集 八幡市教育委員会 1992.3
- 『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』 第11集 同上 1992.3
- 『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』 第10集 山城町教育委員会 1992.3
- 『京都府南山城村文化財調査報告』 第1集 南山城村教育委員会 1992.3

当調査研究センター現地説明会・中間報告資料

現地説明会

- 「天若遺跡第3次」 (京埋セ現地説明会資料 No.91-18) 1991.11.1
- 「長岡京跡右京第349・367次」 (同 No.91-19) 1991.11.29

- 「遠所遺跡・遠所古墳群」 (同 No.91-20) 1991.11.29
「西山塚古墳」 (同 No.91-21) 1991.12.7
「算用田遺跡」 (同 No.91-22) 1991.12.20
「平安京跡(聚楽第跡)」 (同 No.92-01) 1992.2.7
「長岡京跡右京第368次調査(下植野南遺跡)」 (同 No.92-02) 1992.2.21
「蔵ヶ崎遺跡第2次」 (同 No.92-03) 1992.2.28
「細谷古墳群第2次」 (同 No.92-04) 1992.6.19
「薬師古墳群」 (同 No.92-05) 1992.7.29
「西山塚古墳・西山古墓・西山遺跡」 (同 No.92-06) 1992.8.1
「鹿谷遺跡」 (同 No.92-07) 1992.8.6
「定山遺跡」 (同 No.92-08) 1992.8.7
「天若遺跡第4次」 (同 No.92-09) 1992.9.4
「奈具谷遺跡・奈具岡遺跡」 (同 No.92-10) 1992.10.13
「八木城跡」 (同 No.92-11) 1992.10.29

中間報告

- 「平安京隣接地」 (京埋セ中間報告資料 No.91-13) 1991.11.11
「長岡京跡左京第241・267・268次調査」 (同 No.91-14) 1991.11.15
「興戸遺跡第11次」 (同 No.91-15) 1991.11.20
「内里八丁遺跡」 (同 No.91-16) 1991.11.22
「池尻遺跡」 (同 No.92-01) 1992.1.10
「木津川河床遺跡」 (同 No.92-02) 1992.1.28
「八木城跡・堂山窯跡」 (同 No.92-03) 1992.2.27
「鍵田遺跡」 (同 No.92-04) 1992.3.6
「今城跡」 (同 No.92-05) 1992.6.12
「平安京跡」 (同 No.92-06) 1992.6.18
「大切遺跡」 (同 No.92-07) 1992.6.25
「祇園谷遺跡」 (同 No.92-08) 1992.8.5
「燈籠寺遺跡第6次」 (同 No.92-09) 1992.9.3

府内現地説明会資料

- 「重要文化財 教王護国寺(東寺)」 京都府教育委員会 1991.11.8

- 「平成3年度 恭仁宮跡」 同上 1991.12.15
- 「田辺城跡第15次」 舞鶴市教育委員会 92.10.10
- 「有明古墳群・三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群」 大宮町教育委員会 1992.10.16
- 「上ヶ市遺跡」 福知山市教育委員会 1992.8.8
- 「青野西遺跡第5次」 綾部市教育委員会 1991.12.1
- 「庄村遺跡」 同上 1992.9.27
- 「長岡京左京六条三坊跡(水垂F区)」 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1991.11.9
- 「長岡京左京六条三坊三町跡」 同上 1992.2.29
- 「長岡京跡左京第287次(7ANEJK-4地区)」 同上 1992.7.2
- 「椿井大塚山古墳」 山城町教育委員会 1992.4.22

その他の雑誌・報告・論文等

- 『京都府埋蔵文化財情報』 第42号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991.12
- 『京都府埋蔵文化財情報』 第43号 同上 1992.3
- 『京都府埋蔵文化財情報』 第44号 同上 1992.6
- 『京都府埋蔵文化財情報』 第45号 同上 1992.9
- 『京都府遺跡調査概報』 第46冊 同上 1991.12
- 『京都府遺跡調査概報』 第47冊 同上 1992.3
- 『京都府遺跡調査概報』 第48冊 同上 1992.3
- 『京都府遺跡調査概報』 第49冊 同上 1992.3
- 『京都府遺跡調査概報』 第50冊 同上 1992.3
- 『京都府遺跡調査報告書』 第15冊 同上 1991.12
- 『京都府遺跡調査報告書』 第16冊 同上 1992.3
- 『京都府遺跡調査報告書』 第17冊 同上 1992.3
- 『京都府指定・登録文化財等目録』 京都府教育委員会 1991.11
- 『京都の文化財』 第10号 同上 1992.3
- 『あるいてみよう、まなんでみよう。京都の歴史 山城編』 同上 1992.3
- 『京都府立丹後郷土資料館要覧』 京都府立丹後郷土資料館 1992.3
- 『特別陳列図録』 31 同上 1992.7
- 『特別展図録』 23 同上 1992.10
- 『丹後郷土資料館だより』 第23・24号 同上 1992.4~10
- 『大宮町遺跡地図』 大宮町教育委員会 1991.12

- 『網野町誌』 上巻 網野町 1992.3
- 『市史編さんだより』 第3号 宮津市教育委員会 1992.3
- 『ロマンのふるさと弥栄むかしむかし』 弥栄町教育委員会 1992.3
- 『第5回企画展 むらのかじや』 三和町郷土資料館 1991.11
- 『軟式庭球歴史資料展図録』 福知山市郷土資料館 1992.10
- 『福知山市史』 第4巻 福知山市 1992.3
- 『綾部の文化財』 第33～35号 綾部の文化財を守る会 1991.12～1992.8
- 『丹波・亀山城物語』 亀岡市文化資料館 1992.5
- 『第14回企画展展示図録』 同上 1992.7
- 『口丹波史料』 7 口丹波史談会 1991.12
- 『丹波史談』 平成3-特 同上 1992.5
- 『久御山町史』 久御山町 1992.3
- 『郷土史八木』 第5号 八木史談会 1992.3
- 『安定期社会における人生の諸相一年中行事-』 (財)京都ゼミナールハウス 1992.6
- 『京都市の文化財』 第9集 京都市文化観光局 1992.3
- 『京都市の文化財』 第10集 同上 1992.10
- 『京都市文化財だより』 第17・18号 同上 1992.6～10
- 『朱雀』 第4集 京都府京都文化博物館 1991.11
- 『ほとけ・さむらい・むら-京都府指定・登録文化財が語る京都の文化展-』 同上
1992.7
- 『資料館紀要』 第20号 京都府立総合資料館 1992.3
- 『京都府資料目録追録』 No.8 同上 1992.6
- 『総合資料館だより』 No.90～93 同上 1992.1～10
- 『文書の流転と保護』 京都市歴史資料館 1992.5
- 『秀吉の京都』 同上 1992.10
- 『京都市史編さん通信』 No.229～237 同上 1992.3～10
- 『古人のいのり』 特別展図録 京都市考古資料館 1992.3
- 『富岡鉄斎』 (財)泉屋博古館 1992.3
- 『泉屋博古館紀要』 第8巻 同上 1992.3
- 『第43とれんち』 京都大学考古学研究会 1991.11
- 『塑像出土古代寺院の総合的研究』 同上 1992.3
- 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1988年度』 京都大学埋蔵文化財研究センター

1992.3

- 『同志社大学考古学シリーズ』 V 同志社大学考古学シリーズ刊行会 1992.4
- 『佛教大学総合研究所報』 第1・2号 佛教大学総合研究所 1991.12～1992.7
- 『古代學研究所研究紀要』 第2輯 (財)古代學協會 1992.3
- 『古代學協會研究所研究報告』 第3輯 同上 1992
- 『古代文化』 第394～405号 同上 1991.11～1992.10
- 『土車』 第61～63号 同上 1992.1～7
- 『志くれてい』 第39～42号 (財)冷泉家時雨亭文庫 1992.1～7
- 『文化財報』 No.75～78 (財)京都府文化財保護基金 1991.11～1992.8
- 『会報』 第73号 (財)京都古文化保存協会 1992.10
- 『京都考古』 第63～67号 京都考古刊行会 1991.12～1992.7
- 『(財)平安建都1200年記念協会ニュース』 No.27 (財)平安建都1200年記念協会 1992.

5

- 『クラと古代王権』 ミネルバ書房 1991.12
- 『ポリネシア人ー石器時代の遠洋航海者たちー』 (株)同朋舎出版 1991.12
- 『前方後円墳ー埋葬されない墓をもとめて』 同上 1992.8
- 『史迹と美術』 第642号 史迹美術同攷会 1992.5
- 『平成2年度 財団法人向日市埋蔵文化財センター年報 都城3』 (財)向日市埋蔵文化財センター 1991.11
- 『向日市文化資料館報』 第6・7号 向日市文化資料館 1991.11
- 『向日町成立400年』 同上 1992.10
- 『'92向日市勢要覧』 向日市 1992.10
- 『長岡京市埋蔵文化財調査センター年報 平成2年度』 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1992.3
- 『長岡京市遺跡地図 第3版』 長岡京市教育委員会 1992.3
- 『長岡京市史史料編』 二 長岡京市 1992.3
- 『長岡京市市史編さんだより』 No.5 同上 1992.4
- 『長岡京古文化論叢』 中山修一先生喜寿記念事業会 1992.7
- 『宇治文庫3 巨椋池』 宇治市歴史資料館 1991.11
- 『平成2年度 宇治市歴史資料館年報』 同上 1992.3
- 『平成3年度 宇治市歴史資料館年報』 同上 1992.7
- 『宇治人物誌ー日記・物語・肖像ー』 同上 1992.10

【文愛】 第4号 (財)宇治市文化財愛護協会 1992.9

【文愛協会報】 第30号 同上 1992.6

【企画展資料】 13・15 京都府立山城郷土資料館 1992.4

【山城郷土資料館だより】 第16・17号 同上 1992.3~10

【精華町史 史料篇】 II 精華町 1992.3

【波布理曾野】 第9号 精華町の自然と歴史を学ぶ会 1992.3

【紫陽花】 第12~14号 加茂町役場総務課町史編纂室 1992.2~5

受贈図書一覧(4.8.1～10.31)

(財)北海道埋蔵文化財センター	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第73～79集、調査年報 4、深川市納内3遺跡
苫小牧市埋蔵文化財調査センター	とまこまい埋文だより No.28
岩手県立埋蔵文化財センター	わらびて No.57
多賀城市埋蔵文化財調査センター	多賀城市文化財調査報告書 第28～31集
(財)福島県文化センター	福島県文化財調査報告書 第262・263・265・267～269・271～276集
(財)茨城県教育財団	茨城県教育財団文化財調査報告 第70～77集、年報 11、研究ノート 創刊号
(財)鹿島町文化スポーツ振興事業団	鹿島町の文化財 第64・69・71集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第137・138集、関越自動車道(新潟線) 地域埋蔵文化財発掘調査終了記念写真集
横浜市埋蔵文化財センター	横浜市埋蔵文化財センター年報 2、上の山遺跡
(財)千葉県文化財センター	千葉県文化財センター調査報告書 第204～221集、(財)千葉県文化財センター年報 No.16・17、研究連絡誌 第35号
(財)印旛郡市文化財センター	(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第29・35・36・43・51・55～57・59・60・62集、(財)印旛郡市文化財センター年報 7
(財)君津郡市文化財センター	(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書 第54・57・62・63・67・68・72～74集
(財)山武郡市文化財センター	(財)山武郡市文化財センター年報 No. 6・7
山梨県埋蔵文化財センター	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第67～69・72集
(財)愛知県埋蔵文化財センター	埋蔵文化財愛知 No.29・30
(財)岐阜県文化財保護センター	岐阜県文化財保護センター調査報告書 第1～4集
富山県埋蔵文化財センター	埋文とやま 第39号
(財)滋賀県文化財保護協会	滋賀文化財だより No.166～172
(財)滋賀県埋蔵文化財センター	滋賀埋文ニュース 第148～150号
(財)栗東町文化体育振興事業団	栗東町埋蔵文化財発掘調査 1991年度 年報
(財)大阪文化財センター	第10回 近畿地方埋蔵文化財研究会資料
(財)大阪市文化財協会	長原遺跡発掘調査報告 Ⅲ・Ⅳ、長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅰ～Ⅲ、旧佐賀藩大坂蔵屋敷船入遺構発掘調査報告、難波宮址の研究 第9、葦火 39・40号

(財)東大阪市文化財協会	東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告 1991年度、水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡第20次発掘調査報告
(財)枚方市文化財研究調査会	枚方市文化財年報 12、ひらかた文化財だより 第12号
(財)八尾市文化財調査研究会	やおの埋蔵文化財、(財)八尾市文化財調査研究会設立十周年記念誌 10年のあゆみ、特別記念展 八尾を掘る、(財)八尾市文化財調査研究会報告 26、平成3年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告
(財)元興寺文化財研究所	元興寺文化財研究 No. 42
奈良国立文化財研究所	1991年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報、平城宮発掘調査出土木簡概報(25)、奈良国立文化財研究所年報 1991、藤原宮と京、飛鳥の工房、遺跡探査(106) No. 1・2
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第90・97～104・106集、加茂学園都市開発整備事業地内(西高屋地区)遺跡群Ⅶ、研究輯録Ⅱ、ひろしまの遺跡 第50号
山口県埋蔵文化財センター	山口県埋蔵文化財調査報告書 第143～152集
(財)香川県埋蔵文化財センター	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第11冊、いにしへの讃岐 第4号
(財)徳島県埋蔵文化財センター	徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 3、埋蔵文化財講演会講演録
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター	埋蔵文化財のはなしー調査の方法ー、埋文えひめ 第15～17号
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター	松山市文化財調査報告書 第29・30集、松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ
福岡県埋蔵文化財センター	福岡県埋蔵文化財センター年報 第11号
(財)北九州市教育文化事業団	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第98・99・115・116・120・121・123・125～128集、埋蔵文化財調査室年報 8、研究紀要 第6号
深川市教育委員会	深川市内園4遺跡
三石町教育委員会	ショップ遺跡
米沢市教育委員会	米沢市文化財年報 No. 5
鹿島町教育委員会	鹿島町の文化財 第66・68集
群馬町教育委員会	群馬町埋蔵文化財調査報告 第33・34集
北区教育委員会	北区埋蔵文化財調査報告 第8～10集
海老名市教育委員会	相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ、海老名本郷、えびなの歴史
鴻巣市教育委員会	鴻巣市文化財調査報告 第8集、馬室埴輪窯跡環境整備報告書

磐田市教育委員会	大間遺跡発掘調査報告書、国分寺・国府台遺跡 第5次地点、国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書、国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書 第83次発掘調査、竹之内1号墓遺跡発掘調査報告書、御殿・二之宮遺跡、平成元年度 松林古墳発掘調査報告書、岩井安全寺境内墳墓群発掘調査報告書、平成3年度 大宝院廃寺発掘調査報告書
菊川町教育委員会	菊川町埋蔵文化財報告書 第22～24集
大垣市教育委員会	大垣市埋蔵文化財調査報告書 第1・2集、大垣市埋蔵文化財調査概要 平成2年度
多治見市教育委員会	多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書 第28・34集
上野市教育委員会	三重県上野市遺跡地図
小松市教育委員会	戸津古窯跡群 II、小松市埋蔵文化財調査室だより 第2号
氷見市教育委員会	氷見市埋蔵文化財調査報告 第13冊
名古屋市教育委員会	尾張元興寺跡 第5次調査報告書、貴生町遺跡第6～8次発掘調査概要報告書、那古野山古墳発掘調査の記録、東古渡町遺跡 第4次発掘調査概要報告書、西大高遺跡調査報告書、富士見町遺跡第4次発掘調査の概要、名古屋市昭和区山手通一丁目H-1号窯発掘調査報告書、NA320号窯跡群調査報告書、NA302・NN304号窯発掘調査報告書、見晴台遺跡 第30次発掘調査の記録、見晴台遺跡発掘調査報告書―近代編一、特別展「縄文の祈り―愛知県出土の土偶を中心として―」展示図録
瀬戸市教育委員会	上之山―愛知県瀬戸市吉田・吉田奥遺跡群広久手古窯跡群発掘調査報告書、発掘調査35年史展
大津市教育委員会	大津市埋蔵文化財調査報告書 (17)
八日市市教育委員会	八日市市文化財調査報告 (11)
近江町教育委員会	近江町文化財調査報告書 第10集
五個荘町教育委員会	五個荘町文化財調査報告 22～24
高島町教育委員会	高島町文化財資料集 14
中主町教育委員会	中主町文化財調査報告書 第35集
能登川町教育委員会	能登川町埋蔵文化財調査報告書 第23～25集
日野町教育委員会	日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集
茨木市教育委員会	平成3年度 発掘調査概報
貝塚市教育委員会	貝塚市埋蔵文化財調査報告 第24集
岸和田市教育委員会	岸和田市埋蔵文化財発掘調査報告書 1、岸和田市文化財調査概要 17
豊中市教育委員会	豊中市文化財調査報告書 第30・32集、武器・武具からみた5

	世紀の日本と朝鮮、とよなか300万年一大地のなりたちから旧石器時代まで—
寝屋川市教育委員会	市史紀要 第4号
羽曳野市教育委員会	第10回テーマ展示 小さな古墳
阪南市教育委員会	阪南市埋蔵文化財報告 XⅡ～XⅣ
河合町教育委員会	河合町文化財調査報告 第1～7集、馬見丘陵の古墳
榛原町教育委員会	榛原町文化財調査概要 4～8
和歌山市教育委員会	六十谷古墳群発掘調査報告書、和歌山市文化体育振興事業団調査報告 第2～5集
小野市教育委員会	播磨国大部荘現況調査報告書 Ⅱ
加西市教育委員会	県指定無形民俗文化財 東光寺田遊び・鬼会、東光寺田遊び・鬼会、加西市埋蔵文化財調査報告 7～10
龍野市教育委員会	龍野の文化財 1・2、龍野市文化財調査報告 7・8
豊岡市教育委員会	豊岡市文化財調査報告書集 1989年度、豊岡市文化財調査報告書 第26集
西脇市教育委員会	童子山 第2号
篠山町教育委員会	篠山町文化財資料 15～19・22
関宮町教育委員会	関宮町埋蔵文化財調査報告書(6)
倉敷市教育委員会	倉敷市文化財だより 第8号
御津町教育委員会	御津町埋蔵文化財発掘調査報告 7・8
岩美町教育委員会	岩美町文化財調査報告書 第10・17集
東広島市教育委員会	東広島市教育委員会文化財調査報告書 第22・23集
山口市教育委員会	山口市埋蔵文化財調査報告 第40・42・43集
下関市教育委員会	下関市埋蔵文化財調査報告 43、史跡綾羅木郷遺跡 保存修理事業報告書
福岡県教育委員会	福岡県文化財調査報告書 第95～101集、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 22～24、椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 6～9、行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2集、福岡県の民俗芸能、甘木市文化財調査報告 第23集・第23集付編、酒見貝塚発掘調査概報、宗像市文化財調査報告書 第29集、田川市文化財調査報告書 第7集、香春岳、犀川町文化財調査報告書 第3集、椎田町文化財調査報告書 第3・4集、高田町文化財調査報告書 第1・2集、築城町文化財調査報告書 第2集、広川町文化財調査報告書 第8・9集、新吉富村文化財調査報告書 第7集、太宰府史跡 平成3年度発掘調査概報

太宰府市教育委員会	太宰府市の文化財 第10・18集
宇佐市教育委員会	山ノ下横穴群・中原遺跡、下林遺跡、川部遺跡・小部遺跡 8 次調査、虚空蔵寺遺跡
杵築市教育委員会	杵築市埋蔵文化財調査報告書 第3・4集
竹田市教育委員会	竹田地区南部遺跡群 II・III、史跡岡城跡 VI・VII、広域農道 大野川上流南部地区埋蔵文化財発掘調査概報 I・II、岡藩主 おたまや公園整備事業報告書 II・III、平井A遺跡・原山B遺 跡、菅生台地と周辺の遺跡 XV
安岐町教育委員会	はるかなる安岐郷 ふるさとの文化遺産
熊本市教育委員会	上高橋高田遺跡第1次調査区発掘調査概報 I
知覧町教育委員会	知覧町民俗資料調査報告書(3)
秋田県立博物館	博物館ニュース No.89
東北歴史資料館	東北歴史資料館資料集 32
日上市郷土博物館	市民と博物館 第32号
群馬県立歴史博物館	第42回企画展「甦る古代の群馬ー関越自動車道発掘調査終了 記念展ー」解説図録
栃木県立博物館	「中国浙江省文物展」図録
国立国会図書館	日本全国書誌 1877・1878号
出光美術館	出光美術館館報 第79号
世田谷区立郷土資料館	特別展「社寺参詣と代参講」、資料館だより No.17
府中市郷土の森	あるむぜお 第21号
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第38・42集、歴博 第54・55号
神奈川県立博物館	神奈川県立博物館発掘調査報告書 第19集
茅ヶ崎市文化資料館	資料館だより No.80
埼玉県立さきたま資料館	調査研究報告 第5号、資料館報 No.23、さきたま No.4
山梨県立考古博物館	山梨県立考古博物館だより No.26
沼津市歴史民俗資料館	特別展解説「下駄」、資料館だより 104・105号
浜松市博物館	川山遺跡発掘調査報告書、瓦屋西古墳群 II、半田山F古墳群、 有玉西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 上・下巻、博物館資料集 1、浜松市博物館だより 38・39号
名古屋市博物館	名古屋市博物館年報 No.15
斎宮歴史博物館	斎宮編年史料集 1、斎宮歴史博物館研究紀要 1、斎宮歴史 博物館だより No.14
長岡市立科学博物館	長岡市立科学博物館研究報告
魚津歴史民俗博物館	魚津市立博物館紀要 第3号、埋没林のはなし

氷見市立博物館	特別展 開館10周年記念「加藤雨月展」
石川県立歴史博物館	みつけた！発掘物語、石川れきはく 第25号
小松市立博物館	小松市立博物館だより 第53号
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡環境整備報告 II、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 平成3年度発掘調査概要 (23)、朝倉氏遺跡資料館紀要 1991
福井県立若狭歴史民俗資料館	若狭歴史だより 創刊号
敦賀市立歴史民俗資料館	敦賀市立歴史民俗資料館紀要 第7号
滋賀県立安土城考古博物館	おおてみち 第1号
大津市歴史博物館	「シルクロードの都長安の秘宝」展、博物館だより 第11号
大阪府立弥生文化博物館	大阪府立弥生文化博物館図録 5、大阪府立弥生文化博物館資料集 2、弥生倶楽部 Vol. 2
和歌山県紀伊風土記の丘管理事務所	特別展「石の文化ー原始から中世ー」
兵庫県立歴史博物館	館報 1991、特別展「城郭物語」、歴博ニュース No.40、わたりやぐら 第24号
神戸市立博物館	博物館だより No.41
芦屋市立美術博物館	なりひら 第7・8号
西宮市立郷土資料館	西宮市文化財資料 第36号、西宮市立郷土資料館報 平成3年度、西宮市立郷土資料館第7回特別展展示案内図録、西宮市立郷土資料館ニュース 第11号
洲本市立淡路文化資料館	淡路島の仏教美術
水口町立歴史民俗資料館	展示(解説)シート No. 8、碧水 No. 1
島根県八雲立つ風土記の丘	古代の出雲と朝鮮半島、八雲立つ風土記の丘 No.115
広島県立歴史博物館	広島県立歴史博物館ニュース 第11・12号
(財)日本はきもの博物館	日本はきもの博物館だより 47・48
北九州市立考古博物館	よみがえる小倉城下町
甘木市歴史資料館	温故 第14~16号
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書 第9集、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース No.28
熊本市立熊本博物館	熊本自然・文化資料集成 昭和62年度・平成3年度
沖縄県立博物館	沖縄県立博物館年報 No.25、沖縄県立博物館紀要 第18号
東北学院大学東北文化研究所	東北学院大学東北文化研究所紀要 第24号
筑波大学歴史・人類学系	歴史人類 第20号
東京大学総合研究資料館	東京大学総合研究資料館ニュース 25号
慶應義塾大学	湘南藤沢キャンパス内遺跡 第2・4巻

日本大学史学会	史叢 第48号
明治大学考古学博物館	明治大学考古学博物館館報 No. 7
立教大学学校・社会教育講座	Mouseion 38
早稲田大学考古学会	古代 第94号
関西大学考古学研究会	関西大学文学部考古学研究 第6冊
奈良大学文学部文化財学科	文化財学報 第9・10集
神戸女子大学史学会	神女大史学 第9号
島根大学山陰地域研究総合センター	山陰地域研究 第8号
広島大学総合移転地埋蔵文化財調査委員会	広島大学総合移転地埋蔵文化財発掘調査年報 X
山口大学埋蔵文化財資料館	山口大学構内遺跡調査研究年報 X
東京国立文化財研究所	東京国立文化財研究所概要
板橋区赤塚大塚原遺跡調査会	東京都板橋区赤塚大塚原遺跡発掘調査報告書
板橋区四葉遺跡調査会	四葉地区遺跡 平成4年度年報
葛飾区遺跡調査会	葛飾区遺跡調査会調査報告 第15・16集
中央公論社	地震考古学
(株)ニュー・サイエンス社	月刊考古学ジャーナル No. 353
名著出版	歴史手帖 第227～229号
鎌倉考古学研究所	鎌倉考古 No. 23
黒川地区遺跡調査団	黒川地区遺跡群報告書 IV
東邦考古学研究会	東邦考古 第13・15・16号、伊藤左千夫記念館館藏品目録、 佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要 II
全国天領ゼミナール事務局	第7・8回 全国天領ゼミナール記録集
(財)古代学協会	古代文化 第403～405号、古代学協会研究所研究報告 第3輯、 土車 第63号
河内長野市	仁深野 No. 1
関西近世考古学研究会	関西近世考古学研究 II、第3回 関西近世考古学研究会大会 発表要旨
中世土器研究会	中世土器研究 第67号
高山歴史学研究所	歴史学 11、高山歴史学研究所文化財調査報告書 第2冊
(株)保育社	日本の古代遺跡 28・46
(社)近畿建設協会	M I C H I 1992 Summer Vol. 3
(財)のじぎく文化財保護研究財団	下小名田遺跡発掘調査概要 I～Ⅲ、のじぎく文化財だより 第4～6号
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyusyu 40号

京都市文化観光局
(財)向日市埋蔵文化財センター

京都府教育委員会

宇治市教育委員会

京都府立丹後郷土資料館

京都府立山城郷土資料館

京都市考古資料館

京都市歴史資料館

福知山市郷土資料館

京都府立総合資料館

向日市文化資料館

宇治市歴史資料館

京都大学文学部考古学研究室

京都大学埋蔵文化財センター

綾部の文化財を守る会

(財)京都ゼミナールハウス

(財)京都府文化財保護基金

(財)京都古文化保存協会

(財)冷泉家時雨亭文庫

向日市

(財)宇治市文化財愛護協会

伊野近富

樋口隆康

福田 惇

松井忠春

水野正好

村田晃一

京都市の文化財 第10集、京都市文化財だより 第18号

向日市埋蔵文化財調査報告書 第34集

重要文化財 知恩院三門修理工事報告書、京都の歴史 山城編

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第18・19集

特別展図録 23、丹後郷土資料館だより 第24号

山城郷土資料館だより 第17号

「古人のいのり」特別展図録

京都市歴史資料館年報 No.10、第3回特別展 秀吉の京都、京

都市史編さん通信 No.234~237

軟式庭球歴史資料展図録

総合資料館だより No.93

向日町成立400年

平成元~3年度 宇治市歴史資料館年報、宇治人物史一日記・

物語・肖像一

塑像出土古代寺院の総合的研究

京都大学構内遺跡調査研究年報 1988年度

綾部の文化財 第35号

安定期社会における人生の諸相一年中行事一

文化財報 No.78

会報 第73号

志くれてい 第42号

'92市勢要覧

文愛 4号

貿易陶磁研究 第12号、総社市随庵古墳

三角縁神獣鏡綜鑑

季刊明日香風 第36~43号

別冊歴史読本・世界の謎シリーズ 2、韓国道路地図、朝鮮観

光案内、(訳)朝鮮の新石器時代、(訳)朝鮮考古学全書 原始

篇・中世篇、(訳)高句麗史 1、考古民俗論文集 (12)、(訳)

平壤の史跡、(訳)高句麗の古墳壁画

滋賀考古学論叢 第5集

多賀城関連遺跡発掘調査報告書 第17冊、宮城県多賀城跡調査

研究所年報 1990、北からの視点

編集後記

年末が近くなりなにかと気忙しい季節になりましたが、情報46号が完成しましたのでお届けします。

本号では、木津町西山塚古墳の抄報を掲載いたしました。この古墳は、本文中にも述べられているとおり、南山城にあっては珍しいタイプの古墳であり、今年度の調査の中でも成果が上がったものの一つであります。また、職員の日頃の研究成果を2本掲載することができ、本号も充実した内容になりました。よろしくご味読下さい。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第46号

平成4年12月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel(075)933-3877 (代)

印刷 中 西 印 刷 株 式 会 社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
Tel(075)441-3155 (代)